高町亜美の物語

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
高町亜美の物語

【Ｎコード】
Ｎ７７６５Ｙ

【作者名】
学校嫌い

【あらすじ】
黒い穴に吸い込まれ、空に放り出された高町亜美は、落下中にドラゴンと遭遇するが意識を失ってしまう。次に目を開けた時、高町亜美の目の前にはいたのは――――――。高町亜美。彼女は異世界で何を成すのか。

―初恋―

「ひゃあああああああ！」

自由落下を始めて五分程経過しているけど、紐なしバンジーみたいで楽しい。バンジージャンプをしたことがないからいまいち感覚は分からないけど、戻ったらやってみようかな？あとスカイダイビング・・・は今してるからいいや。

バサ！

突然聞こえた、何か羽ばたく様な音のした方を見ると、そこには白くて巨大なドラゴンがいた。正確にはどうか分からないけど、まあ形状からして間違いないと思う。なんでドラゴンがいるのか、とか思いはしたけど、多分ここって日本じゃないから、いても可笑しくはないかな、とも思う。

はあ・・・やっぱり日本じゃないのか・・・。

それを何となくでも理解すると一気にテンションが下がった。さっきまでの楽しい気分が嘘みたいだ。少しは希望があったんだけどなぁ・・・せめて地上が見えてくるまでは、日本だって思っていたかった。街なんかを見れば、どこだか大体の見当は付くと思ったけど、ドラゴンなんて、日本どころか世界のどこにも存在する訳がない。

バサ、とまた羽ばたく音が聞こえて、見ると落下しているあたしを、

さっきのドラゴンが追いかけてきていた。

ここで死ぬのかな？

そう思った途端、一気に恐怖が込みあがってきた。

やだ・・・こんな訳の分からない所で死にたくない・・・。

「たすけて・・・旭・・・」

何の力も持っていないあたしに何ができる訳もなく、唯それを願うことしかできずに。

目尻に浮かんだ涙をどうすることもできずに。

あたしは意識を失った。

何かがあたしを受け止めるのを感じながら――――

旭と雫の二人とは、転校した小学校で会った。初日にみんなに見ら

れているのを少し恥ずかしく思いながら、自己紹介をして、席に向かうと、後ろには無表情の男の子がいた。

その男の子が旭だった。

話しかけても無視されて、人付き合いが苦手なのかな？と思いながら席に着くと、前に座っていた女の子が小声で、何言っても無視されるから放っておきなよ、と言ってきたけどあたしはそんなことどうでも良かった。

折角席が近くなったんだから、お喋りしたい。

その日からあたしは、ずっと旭に話しかけていた。一週間経っても二週間経っても旭は一度も返事をくれたり、表情を変えてくれたりしなかったけど、一ヶ月位が経った時に、旭の顔を暫くじ～っと見つめていて、笑ったらどんな顔するのかな？と思って、

『ねえ・・・少しは笑おうよ？』

と言うと、旭はどうして、と聞き返してきた。

質問された、ということよりもやっと返事をしてくれたことの方が嬉しくて、あたしははしゃいでいた。そんなあたしを見て、今度は旭から問いかけてきた。

『何がそんなに嬉しいの？』

と。

あたしはその問いに無視されると辛いから、みたいなことを言ったと思う。

そして、また旭は質問に答えてくれてないと言って、あたしは笑った顔が見たいだけ、と答えた。

『・・・・・はは』

その時、旭は初めて笑った。

何かおかしな所があったのか、それ以外に何かあったのかは分からないけど、とにかく旭は笑った。

それからは旭が笑うことはほっっっっとんど無かったけど、それでも色々話してくれるようになった。

二年生になって、いつだったかは忘れたけど、一人で体育の後片付けをしている雫を見つけて、あたしと旭で手伝って、その時は、まあ関わることは無いだろうな・・・って思ったけど、次の日に雫の方から来てくれた。

用件は昨日のお礼だったみたいだけど、一度言ってくれたんだからそれで十分だったんだけど・・・とは思ったけど、多分本人もそれ

が目的だったんじゃないと思う。

それからは雫も加わって、三人でいることが多くなった。流石に修学旅行の時とかは無理だったけど、そういったこと以外では、ほぼ毎日。その過程で、あたしは段々雫に対して抱いている好意が友達に対するそれとは、どこか違うな、と思うようになった。

それが何なのか理解したのは、雫が小学校を卒業した時だった。

明日から雫はこの学校にいないんだって思うと、急に胸が締め付けられた気がして・・・。

これが好きって感情なんだって、子どもながらも理解できた。

旭は気付いていたみたいだけど、何故か教えてくれなかったんだよね・・・。それで良かったって思ってるけど。

雫も気が付いていたことにはびっくりしたけど。

ま、その恋が実ることは無かったけど、変わらず一緒にいてくれたから嬉しかった。

その内、誰か別の人を好きになるだろうなぁ・・・とは思っていたけど、結局今日まで、他の女の子に恋をしたことはなかったな・・・。

『貴女の初恋が私だっていうことは、私にとっては光栄よ?』

そう言ってくれただけでも嬉しかったから、良かったかな?

そんな雫の初恋は旭だったんだよね・・・どうもあたしは恋愛沙汰に疎い様で、雫が旭対して抱いていた好意が恋愛感情だとは気付かなかった。

今では、二人ともめでたくカップルになっているけど・・・二人とも同じ場所に飛ばされかな？

あの二人にはずっと一緒にいてもらいたい。

旭なら雫を何があっても守ってくれるだろうから。

でも、もし別々の場所に飛ばされていたら、誰が雫を守ってくれるんだろう？

誰が雫の隣に立つんだろう？

ツンツン・・・と何か、先の尖った様な物につつかれているのを感じて、あたしは落下中に意識を失ったことを思い出して、目を開いた。

「グオォ～」

目の前には、さっきの白いドラゴンがいて、その蒼い瞳に心配そうな色を浮かべてあたしを見ていた。

―契約―

『やっと目を覚ましてくれた！』

「え？」

目の前にいた、心配の色を浮かべてあたしを見ていた白いドラゴンに驚く前に、何か声が聞こえてどこから聞こえたのか辺りを見回してみた。

どうやら此処洞窟のみたい。壁には松明や照明と言った光源が無いのに、何故か遠くまで見えるほど明るい。大きさから考えると、ドラゴンの巣か何かかも知れない。

適当に見回して、もう一度ドラゴンに視線を戻そうとしたら、

『どうかした？』

とまた声が聞こえた。

頭の中に・・・直接？

そんな感じだった。

こんな経験はしたこと無いし、するなんて思ってなかったから、分からないけど、所謂テレパシーというやつかもしれない。それなら、あたしに話しかけているのは、目の前のドラゴンってことになるのかも知れないけど・・・どうなんだろう？

「今、あたしに話しかけているのはあなたなの？」

自分で言うのも何だけど、いつになくあたしは真剣になって聞いた。

旭と雫が見たら、多分驚くかも・・・。

『うん。もう大丈夫？』

声が聞こえて、明らかにあたしの質問に答えている回答言葉だったから、声の主はこのドラゴンだと確信できた。

どこか幼さを残すような声をしていて、でも通る声。

外見も手伝ってか、余計に綺麗に見えた。

と、今はそんなこと考えてる場合じゃないか・・・。

「いきなり変なこと聞いてごめん。助けてくれてありがとう」

『ううん。ボクがそうしたいからしただけ』

「それでも、助けられたことには変わらないから・・・。それで、どうして、あたしを？」

ドラゴンがどんな生命体なのか、なんてことは分からないけど、漫画なんかでは大抵が強敵として描かれたりしている。

そんなドラゴンがどうして、人間を助けたんだろう？

考えたけど、返ってきたのは

『助けたいと思ったから』

と言う、なんとも表現しがたい言葉だった。

回答として少しずれている気がしたけど、本人がそう思って行動したなら、あたしにとやかく言う筋合いはない・・・。

「そっか」

『ねえ、貴女の名前は？』

「え？あ、そっか・・・名乗ってなかったね。あたしは高町亜美」

『アミ・・・。いい名前』

「ありがとう。あなた？」

そう聞くと、ドラゴンは少しの間黙った。

『・・・わたしに名前はないの』

「・・・・・・」

それを聞いても、あたしは不思議と取り乱さなかった。

「白亜（はくあ）」

『え？』

「え？あ・・・何だろう？あなたを見てたら、急に浮かんできたんだけど・・・ごめんね？なんでも　ないから気にしないで」

本当に急に、浮かんできて、自分でも戸惑っていた。

『ハクア・・・』

ドラゴンはその単語を噛みしめるように、呟いて、その後も何度か繰り返した。

『わたしと契約して？』

「え？」

多分十回目くらい、ハクア、と呟いた後、ドラゴンは唐突にそう言

った。契約って言うのがなんなのか、そんなことは分からない。
分からない筈なのに、分かった。
だから

「うん」

あたしは頷いた。

立ち上がり、ドラゴンと向かい合う。

目を閉じて、意識をドラゴンにだけ集中すると、唯でさえ静かだったこの洞窟が余計に静かになったような気がした。感覚が鋭くなっているのか、周りに存在する小さな存在。それがなんなのか分からないけど、それも感じ取ることができる。

『我の御魂は汝と共に
汝の御魂は我と共に』

「汝の御魂は我と共に
我の御魂は汝と共に」

キン、と甲高い音が聞こえた。

『汝我に名を与えたまえ』

「汝の名はハクア」

『我の名はハクア』

「『我の御魂は汝と共に
汝の御魂は我と共に』」

ゆっくりと目を開きながら、最後の言葉を紡ぐ。

あたしとハクアの立っている場所に何か、複雑な紋様が浮かんだ、円が浮かんでいた。

例えが、魔法陣くらいしか思い浮かばないけど、多分それに近いもの。

『後はお互いの血を一滴飲めば、儀式は終わり』

人差し指をハクアの前に出して、鈎爪で指先をちょんと突いてもらうとそこから血が、少し膨らむように出てきた。顔を降ろしてきて、ハクアは指先を舐めて、こくん、とその大きな喉を鳴らした。

すると、ハクアの体が柔らかい光に包まれて、姿が段々変わっていった。

小さくなっていき、その姿は少しずつ人間に近づいていった。

光が収まった時、そこには小さな女の子が立っていた。

髪はあたしと同じくらい白くて、身長はあたしより少し高い位。服装は白いワンピースだけ。

肌は白いけど、不健康な印象は全くない。

少女の姿になったハクアは自分の指先を噛み、あたしの方に突きだしてきた。

その指先を口に銜えてその血を舐め取り、飲み込む。

ドクン、と心臓が鳴り、体の中が熱くなった。

この後すぐにあたしは意識を失うことを、どうしてか分からないけど、分かっていた。

この先、あたしはこの何も分からない土地で生きていく。

多分・・・いや、きっと元の世界には還れない。

二人にも、もう会えない。

「泣かないで？」

その言葉を最後に、あたしは意識を失った。

旭。

雫。

———さようなら

―開始―

「ん・・・？あ、そっか・・・」

あたしハクアの血を飲んだ後、気を失ったんだっけ？どれくらい寝てたのか、分からないけど・・・ハクアはどこだろう？

洞窟の見える範囲にはいない。

ご飯でも探しに行ってるのかな？そういえば、まだ何も食べてないんだよね・・・帰る途中で吸い込まれたから、お腹も結構空いてたんだけど、こっちに来てからはそんなこと気にする余裕が無かったし。とりあえず・・・待っておこう。

感覚的に三十分位経った頃、小さな羽ばたき音が聞こえて、見てみるとハクアが姿は少女のままで背中の翼を広げて飛んできていた。その手には何か鹿の様な生き物を抱えている。

まあ、それは良いけど、大きさがね・・・ハクアの倍はある訳で・・・。

細かいことはいいか。

「あ！アミ！やっと起きた！」

あたしの姿を確認したハクアが、嬉しそうにそう言いながら、隣に降り立った。持っていた鹿の様な生物をハクアが降ろすと、ズシンといかにも重そうな音がした。

「やっとって・・・？あたしどれ位寝てたの？」

寝ている間の記憶が無いのは多分当たり前だけど・・・ハクアの言い様からして、一日二日って感じゃない気がした。

「百年」

「は？」

思わず頓狂な声を出してしまった。

百年？

１００年？

ひゃくねん？

ヒャクネン？

なんか最後の名前みたい。

「いやいや、そうじゃなくて！百年！？嘘でしょ！」

まず前提があり得ない。人間仮に百年寝て過ごしたとしても、その間体は成長するんだから少しは背丈が変わっていても可笑しくない。それなのに、あたしの体は悲しい位気を失う前と同じ。何より、百年も寝ていたなら、その間の栄養はどこから摂取してたんだろう？

「ううん、ホント。でも、さっきはやっとって言ったけど、これは凄いことだよ？」

凄い？

「何が？」

百年寝ていたことが？

うん、まあ、百年寝ていたことはもう認める。

「わたし達ドラゴンの血が人間の体に馴染むには最低でも五百年、長かったらそれこそ何千何万という年月が必要になるのに、たったの百年で馴染んだんだから」

どういうことか聞くと、本来ドラゴンと契約するには相当の鍛錬を積み、肉体的にも精神的にも極限まで鍛えられた者でないとまずできないらしい。これはドラゴンの血に耐える為で、それを疎かした場合、口に含んだ瞬間に強烈な拒絶反応が出て、飲み込むことすらできないとか・・・。

そして、歴史を辿ってもドラゴンと契約した者はたったの三人で、その三人ですら、馴染むのに千年近く掛かったとか・・・。

それなら、どうしてそんな鍛錬なんかとは無縁だったあたしが耐えられたのか？

その上で、たった百年で血が体に馴染んだのか？

それについてはハクアも分からないらしい。

「何かあるのかも知れないけど、とにかく良かった！」

まあ、いいかな？

そこであたしのお腹が鳴り、空腹を訴えた。

そして、ハクアが持ってきた鹿の様な生物を見ると、何故か食欲が沸いてきた。

「あ、お腹減った？今から焼くからちょっと待っててね？」

「焼く？」

あたしの疑問には答えず、ハクアは鹿・・・もう鹿でいいや。それを持ち上げ、ひょい、と上空に少し投げて、それに向かって

———ゴアアアアア！

炎を吹き付けた。

口から吹いて・・・。

そして落ちてきた鹿はこんがりと焼けていた。

それがまた香ばしい匂いを発していて食欲をそそられる。

「はい、召し上がれ」

「いただきます！」

鹿にかぶりついてどんどん食べていく。そして、あたしの体の倍はあった鹿は、十分程で全てあたしのお腹の中に収まった。

「いい食べっぷりだね。それだけ食べられるなら、問題はないか」

「・・・ドラゴンと契約すると、ご飯もそれになるの？」

そう聞くと、ハクアは頷いた。

「あとは、治癒力とか、腕力とか脚力とか、身体能力は全て常人のそれを上回るよ？試しに壁でも殴ってみて？」

ちょんとつつく位でね？とウインクをして言ったハクアにあたしは少しときめいた。

とりあえず、壁に向かって拳をちょんと当てると、

ゴバアッ！！

「え〝・・・？」

十メートル位の横穴が開いた。

それから、まずは力の制御をできるようにしなければならないと分かったので、ハクアに色々教えて貰った。

殴ったり、物を掴む時は、力をこれでもかと言う程緩めて、本当に触れるか触れないか位にしないと木っ端微塵にしてしまうらしい。

「まあ、要は慣れだよ」

えらくアバウトな・・・。

でも、実際そうか・・・。

「多分早ければ、明後日には制御できるとそれくらいできると思うから、そしたら世界を回ろうか？アミのことも聞きたいし」

「うん」

早速力の制御の特訓を開始して、予定通り二日後にはできるようになったから外に出ることにした。

洞窟を出て最初に見たのは、地球ではあり得ない程の森林で覆われた大地と、遙か彼方に見えるのに圧倒的な存在感を放つ巨大な山だった。

その景色に見惚れているあたしにハクアは言った。

「――――ようこそ、ウルベリアへ」

―開始―（後書き）

亜「ハクア、あたしが寝ている間なにしてたの？」

ハ「アミをつついたり、アミを眺めたり、アミを舐めたりしてた」

亜「最後のはなに？」

ハ「見てたらつい。テヘ」

亜「ぐ・・・可愛い／／／」

ハ「アミ？顔赤いよ？」

亜「なんでも無い！」

ハ「あ！アミ、待ってよ。道分からないでしょ？」

―永遠―

洞窟は崖の中腹辺りにあって、ハクアに飛び降りると言われた時、大丈夫なのか心配になったけど、契約してるから大丈夫と軽く言われた。

まあ、確かにそうか・・・。

それでも怖いのは怖いから、ハクアと手を繋いで一緒に飛び降りた。

途中何度か木に当たったりもしたけど、どこもけがとかしなかった。

凄いね、契約。

「此処は誰も来ないけど、魔物はわんさかいるから、警戒しておいてね？」

「まもの？」

「そ、この前、アミが食べたのも魔物」

ハクアはあたしの手を引っ張って、歩き始め、魔物についての説明を始めた。

この世界・ウルベリアにはマナと言う、地球で言う酸素の様な物質が絶えず循環していて、動物は全てそれを吸収して生きているらし

い。

そのマナを長い間吸収し続けて、他の動物よりも凶暴性が増したり、知性が増したりと表れる症状というか、それは動物によって色々な種類があるらしい。

でも、大部分が凶暴性が増すだけで理性を失って暴れるらしい。知性が増したりするのはほんの一部だけ。

「魔物の始まりは約五千年前。たった一体から始まった」

そのたった一体の魔物と言うのが、繁殖力の高い生物だったみたいで、瞬く間に増えていったらしい。

最初はその種の魔物しか居なかったのが、異種交配とでも言えばいいのか、それによってどんどん種類が増えていって、気付けば世界には魔物が溢れていたらしい。

「ま、それで滅びたりした訳じゃないけどね？現に今も、ウルベリアは存在している訳だし」

ハクアはそう言って、魔物の話を終えた。

＊

三日くらいかけて森を抜けると、人の手が全く入っていない平原があった。

視認できる範囲だけでも結構な数の魔物が居るけど、どの魔物もあたし達に襲い掛かってきたりしない。

ハクアが言うには、魔物ももとは普通に動物だから、本能があたしたちは危険だと告げているみたいで敵わないことが分かっているらしい。

ちなみにハクアと契約した恩恵というか、そういったものは結構ある。

遠くの物が見えたり、普通なら聞こえないレベルの音が聞こえたり、ほんの少しの匂いも分かったりと、簡単に言えば、感覚という感覚の全てが、桁外れになっている。

「だから、当分アミの相手はわたしがするから」

「うん。それで、この平原てどこまで続いてるの？今の視力でも先がずっと平原なんだけど・・・」

「そりゃそうだよ。普通の人間が此処を抜けようとしたら、どんなに強い人でも一月は掛かるもん」

「一月ね・・・何でだろう？既に百年生きてるからなのか、長いと思わない」

聞いた瞬間、え？たったそれだけ？とか思ったもの。

「あはは。時間に対する感覚もわたしたちと同じになるからね。今のアミだったら、千年が一年くらいに感じるかも知れないよ？」

「千年って・・・いくら何でもそこまで寿命は持たないでしょ？」

ドラゴンだけなら、それくらい生きても可笑しくないとは思うけど、契約したとは言っても、結局あたしは人間なんだし・・・あれ？でも、契約して血が馴染むのに千年掛かることもあるって言ってたし、あるのかな？

でも、仮に寝てる間体の時間が止まってるとしたら、生きてるのはむしろ当たり前な訳だし・・・。

「ううん。持つよ？というか、死なないから」

「・・・・・・は？」

「死なないよ？アミも、もちろんわたしも」

「え？どういうこと？」

流石にこれはさらっと聞き流してはいけない。

死なないってことは、要は不死身ってことだし・・・。

「この、死なないって所が、ドラゴンと契約して得ることの出来る最大の恩恵、とでも言えばいいのかな？わたしたちドラゴンの生命

力は、他のそれとは一線を画しているから」

「でも、それが死なないってことに繋がる訳じゃ無いでしょ？」

「もちろん」

ハクアは歩き始めた。

あたしもそれについていく。

「この前、魔物の話をしたでしょ？」

空を見上げ、後で手を組みながらハクアは聞いてきた。

「うん。約五千年前から始まったって・・・」

「そう。でもね？わたしたちドラゴンはもっと前から、それこそ、ウルベリアが誕生した位大昔から存在してるの」

「それって、どれくらい前から？」

「ざっと数えて八十億年」

「そんなに！？」

「うん」

地球で言う、恐竜みたいな存在ってことなのかな？

例えが思いつかない。

「でも、その時を全てのドラゴンが生きてる訳じゃなくて、今生きてるのは、わたしを除けばほんの四体だけ。他のドラゴンは、契約者が見つからなくて、寿命で死んじゃったり、老衰して殆どの力を失っていた所を、人間や特別強い力を持つ魔物に殺されたりしてね・・・気が付けば、たったのそれだけになってた・・・」

顔が見えないから、分からないけど、多分今のハクアは悲しい表情をしていると思う。

「話が逸れたね。

ドラゴンは元から超長寿の生命体であり、自分が認めた者と契約を結ぶことが出来れば、永遠の命を得るってこと。

未だに、何故そうなるのかは分かってないけどね？」

振り向いたハクアは、いつもと変わらない顔をしていて、悲しんでいた様な気配すら無かった。

「・・・・・・」

「もしかして、迷惑だった？」

何も言わないあたしに対して、何を思ったのかハクアは突然そんなことを聞いてきた。

「え？何が？」

「何がって・・・契約したこと。説明も何もしないまま、半ば無理

矢理な気がしたから・・・」

「そんなこと無いよ。唯、ハクアが悲しんでるんじゃないかって思って・・・」

「え？・・・あはは、確かに悲しいけど、もう慣れちゃったから・・・一人で居た時間が永すぎて。だからって訳じゃ無いけど、そんな心配はしなくてもいいよ？

寧ろ今は、迷惑じゃなかったって分かったから、嬉しかったし」

「そっか。良かった」

あたし達はまた手を繋いで、平原を進んだ。

暫く進んだ所で、休憩ついでに空の飛び方を教わることにした。

森を歩いている時に、飛べるってことは聞いたけど、流石に木ばかりの所を飛ぶのは無謀だろうと思って、先延ばしにしてたんだよね・・・。

「教えるって言っても、わたしたちにとって、飛ぶことは本能だからね。原理がどうこうの話じゃないんだけど」

「でも、あたし本能どころか翼すらないし」

背中に手を伸ばしてみても、それらしき物がある感じはしない。

「背中に思いっきり力を入れてみて？」

「え？どうして？」

「いいから」

「？うん」

分からないけど、とりあえず言われたとおりにしてみる。

「ふっ！」

バサ！

「え？」

力を入れた瞬間そんな音が聞こえて、首を九十度横に向けて見てみると、そこには白い翼があった。

間違いなくあたしの背中から出てるんだろうけど、痛みとかが全くないのはどうしてだろう？

聞いてみると、

「どんな傷も一瞬で治るからね。服は直らないけど」

とのこと。

まあ、確かに翼の音が大きかったけど、勢いもそれだけあった訳で、

制服は見事に破れた。

「一度出すのに成功すれば、後は出し入れ自由だから。試しに引っ込めてみて？」

「えっと・・・こう？」

広がった翼を、少しずつ小さくしていく感じで、畳んでいくとまた背中には何もない状態になった。

穴が空いた所が少しスースーする。

「そうそう。それじゃ、練習を始めるから、もう一度翼を出して？あ、力は軽く入れるだけでいいよ？」

「うん。んしょ」

ハクアの言ったとおり、今度はほんの少し力を入れるだけで、翼が出た。

「最初はわたしと手を繋いで、飛んで、少しずつ慣れていこうか？」

「うん」

「はい」

翼を広げながら、ハクアは手を差し出してきた。

あたしはその手を取る。

「行くよ？」

「うん」

手を繋いで、あたし達は空へと舞い上がった――――

―永遠―（後書き）

亜「それにしても、不死身かぁ～・・・ハクア、暇じゃなかったの？」

ハ「暇だったけど、人間は色々新しい物を造るからね。それを見ているのは楽しかったよ。後は、偶に仲間とも会ってたし」

亜「どんなドラゴンなの？ハクアの仲間って」

ハ「年中百％天然な娘に、どんな時どんな状況でも寝られる娘でしょ。それから、とにかく遺跡巡りが好きな娘と、海でひたすら海獣と戦ってる娘」

亜「へ～・・・面白そうな人達だね？」

ハ「うん！きっと仲良しになるよ？」

亜「だと良いけど」

―登録―

飛行練習を始めて、約五時間が経ち結構飛べるようになった。

ついでにこのまま平原の先にある街まで飛んでいこうと言うことになった。

この世界には魔法があって、それの中に飛行魔法はあるらしいけど、それは・・・というか、魔法全般において、使用するにはある程度の才能と内包している魔力が必要だそうで、使える人の中でも個人差が大きいらしい。

魔力の量は、十五年、つまりこの世界で、成人となる年になるまでに呼吸して取り込んだマナをどれだけ留めることが出来たかで決まるとか。

大体の人は火の初級魔法であるファイアボールや水の初級魔法であるアクアボールは使えるらしい。

全く使えない人の方が珍しいとかなんとか・・・。

「でも、今アミがやっている飛行は魔法とか関係ないよ？これも恩恵だからね」

なんとなくそうじゃないかな、とは思っていた。

翼を出した時も、飛び上がった時も、飛んでいる今も、その魔力とやらを使っている様な感じはしない。

そもそもあたしに魔力があるのかどうかも分からないけど。

街が見えてきた所で、近辺に人が居ないのを確かめて街道に降りる。

「誰かに見られたら面倒だからね。誤魔化せば良いけど、見破る人もいるから」

「そんなこと出来るの？」

「うん。て、凄く今更なんだけどさ・・・アミ、色々知らなすぎじゃない？」

「当たり前だよ。この世界の人間じゃないもん」

「・・・へ～・・・へ？」

言うとハクアは、きょとんとした顔をした。

可愛いな。

＊

「つまり、そのちきゅう、っていう世界のがっこうって所に通って
て、幼馴染みの二人と帰っていたら、黒い穴に吸い込まれて」
「飛ばされた。正確には落とされたのかな？それがここ、ウルベリ
アだったってこと」
とりあえず、街道から見えていた街。
ニュアージュの宿で部屋を取って（お金はハクアが持ってた）、そ
こでこっちにきた経緯を話した。
といっても、ハクアが繰り返したことを少し詳しく話しただけなん
だけど・・・。
「だから空中に居たんだね？」
「そういうこと。最初はスカイダイビングみたいで楽しいと思った
けど、ハクアを見て、地球じゃないってことを認識したら、急にテ
ンションが下がったんだよね・・・」
「・・・・・・」
「まあ、ハクアがあのとき、あそこを飛んでなかったら、あたしは
そこで終わってたけど。
だから、ありがとうね？助けてくれて」
「アミ・・・。うん！」
話はそこで一旦終わりにして、次はこの世界の通貨について教えて

もらった。

銅貨・銀貨・金貨・白金貨。

銅板・銀板・金板。

銅貨が日本で言う百円分。

銅貨五十枚で銅板一枚、五千円分と交換出来る。

銀貨が一枚一万円。

これも五十枚で銀板一枚、五十万円分と交換可能。

金貨は一枚百万円。

これは十枚で金板一枚、一千万円分と交換可能。

白金貨は一気に跳ね上がって、一枚一億円に当たるらしい。

これは板が無いそうで、交換不可。

「でも、白金貨なんて、殆ど貴族とか王族とかにしか縁が無いけどね？」

それはそうだろう。
一億円なんて額がおいそれと出回る訳がない。
宝くじの様な物でもあれば別だろうけど。

「ついでだから、ギルドについても話そうか」

「ギルド？」

「うん。依頼とか魔物の討伐とか受けて、報酬としてお金やアイテムを貰うとこ。十二歳以上で二人以上なら誰でも登録できるよ？」

二人以上と言うのは、危険を最小限に減らす為の、本部の措置らしい。

魔物の討伐の中には、一人では到底倒せない魔物も居るらしくて、もし戦闘中どちらかが死んでしまう様なことになったら、残った方が助けを呼ぶか、逃げることが出来るようにしているとか。

「死なずに二人とも帰還・・・ていうのが一番良いんだけどね・・・。

命が無いと、人は何も出来無いどころか、しようと思うことすら出来ないから」

「確かにね・・・。

ギルドのことは分かった。

それで、疑問なんだけど、あたしとハクアは死なないんでしょ？それって、寿命で死なないってこと？心臓を抉られたりしたら、死ぬの？」

我ながら例えがぐろいな、とも思ったけどこれは知っておかないとだめなことだろう。

「死なないよ？文字通り死なない。死ねないって言ってもいいかな？例え心臓が抉り出されても、一時的に永い眠りに着くだけで、次に起きた時には心臓は再生してる。

他の臓器も部位も同様に」

ただしそれは契約者のみ。

ハクアは最後にそう言った。

＊

ギルドに登録していれば、通行証替わりとかにもなるからってことで、登録することにして、とりあえずこの街にあるギルドに来たけど、入った途端周りの人から変な視線を向けられた。

無視して受付に行き、登録しに来たことを伝えると、紙を渡されて名前と年齢、それからスキルと言う欄があった。

「ハクア、スキルって？」

「その人が持ってる特技みたいな物だよ。詳細は説明するよりも、自分で見て確かめた方がいいから、まずは持って行こう？」

「うん」

とりあえず空欄のまま、名前と年齢だけを書いて、また受付に行って紙を渡した。

「確認させて・・・・・・・え？」

紙を見た途端、受付のお姉さんが固まった。

でも、すぐに元に戻って年齢が間違っていますよ、と言ってきた。

紙が返ってきて、確認する。

でも間違っていない。

ちゃんと百十六と書いてある。

ハクアの方も間違って居ないみたい。

「あの、これで合ってますよ？」

「え？でも、百十六って」

「はい。あたし百十六歳です」

「え？ええ・・・」

お姉さんは、混乱してしまった様で少々お待ちを、と言って奥に消えた。

五分ほどして、ここの理事長かなにかなのか、白髪の厳ついおじさんと一緒に戻ってきた。

目が鋭すぎ・・・。

「お前達か？これを書いたのは？」

おじさんが見せてきたのは、さっきあたしとハクアが書いた紙だった。

同時に頷く。

「大人をからかうもんじゃない。見栄を張る必要なんてねえんだから、本当の年齢を書け。こっちも仕事だからな」

「だから、本当の年齢を書いてるんですけど？大体年齢で嘘付く必要なんか無いじゃないですか」

「そうですよ」

「だから、嘘はつくなと言っている」

「ついてません。本当に百十六歳なんです」

「んなわけあるか。自分の姿ちゃんと見たことあるか？」

「ありますよ。毎朝見てましたよ。歯磨きするんですから」

「それなら、どう考えても百十六なんてのがあり得ないことは分かってるだろ？」

「分かってますよ。でも本当なんです。なんなら確かめてみて下さいよ？」

「はあ・・・分かった。奥に来い」

折れないあたしに折れたのか、おじさんにそう言われて、あたしとハクアは奥についていった。

通されたのは、大きな部屋でそこのソファに並んで座り、正面にはおじさんが座っている。

「たく・・・ガキの冗談に付き合ってる暇なんか無いんだけどな・・・」

溜息をついてそういうおじさん。

「いいから、早く確かめて下さいよ？」

「分かった分かった。オレの目を見ろ」

言われておじさんの目を睨む。

「睨むな」

「睨んでません。これが普通です」

「はあ・・・いいか？反らすなよ？」

「・・・・」

何も言わず睨み続ける。

すると、おじさんの目に何か紋様の様な物が浮き上がってきた。

少し驚いたけど、そのまま睨んでおく。

「！」

おじさんの目が急に見開かれてビックリした。

「アミ、そんなに驚かなくていいよ？これで分かりましたよね？」

「あ、ああ・・・悪かった」

まあ、その後、手続きを済ませて、無事ギルドカードを発行してもらえた。

本人が持って、念じれば表示を出したり消したり出来るらしい。

便利だこと。

「それじゃ、スキル欄を見てみて？念じればいいよ？」

「うん」

手に持って、念じてみると、多分表に名前と年齢が表示されて、中央辺りに大きくDと出た。

これは後で説明して貰おうとして、カードを裏返す。

『契約者』

裏にはそれだけ書かれていた。

―登録―（後書き）

亜「全く・・・あのおじさんは、しつこいんだから」

ハ「まあまあ。いいじゃない、分かってくれたんだから」

亜「まあね？それで、おじさんが使ってのがスキル？」

ハ「そ。街に入る前に言ってた、見破るスキル。敵の弱点とか、能力値とか色々分かる結構便利なスキル」

亜「へ～・・・。まあ、追々知っていけばいいかな？」

ハ「うん。時間は本当にいくらでもあるからね」

亜「そうだね。色々教えてね？」

ハ「もちろん」

―魔法―（前書き）

ハ「今回は初クエストに行って帰ってくるまでの話だって」

亜「ちゃんと纏められるの？」

ハ「それは作者次第」

―魔法―

契約者。

ハクアによると、この言葉はあたしの様にドラゴンと契約した者の他に、精霊や魔具と契約している人たちも纏めてそう呼ぶらしい。

精霊はマナが一か所に集まり、そのまま長い年月が経つと生まれる、意思を持ったマナで、容姿も性別もちゃんとあるらしい。

マナが集まった場所によって、その精霊の属性もかわるとか。

魔具と言うのは、所謂曰く付きの道具のことで、呪いが掛けられていたり、意思を持っていたりする道具のことの総称らしい。

精霊も魔具も契約すれば、ドラゴンとの契約と同じようにいくらかの恩恵があるみたいだけど、それは個々で全く別の形として現れるそうで、どんな恩恵が得られるのかはするまで分からない。

お楽しみ、みたいなものだろう。

契約者と言う一単語で表すのは、それを周囲の人が知った時に起こる混乱を防ぐ為。

ドラゴンとの契約者は今の時代ではあたし含め四人。

この前教えてもらった、三人の契約者。

その三人もあたしと同じように不死になってるからね・・・。

「ここにはそれしか書かれていないけど、詳しく知りたいならもう少し強く念じてみて？」

言われた通り念じてみると、頭の中にいろんな情報が入ってきた。

一つ目は『千里眼』

遠くを見渡す眼を持っているものが得るスキル。

強化不可。

強化についてはまた聞こうと思って、次に項目を見る。

『地獄耳』

意識して聞くことで、どれだけ小さな音も聞き分ける。

強化可能。

現段階レベル・1

『絶対嗅覚』

無害か有害かを嗅ぎ分けることができる。

強化可能。

現段階レベル・1

『龍燐（リュウリン）』

任意により体を龍の鱗で覆うことができる。

強化可能。

現段階レベル・1

『気配感知』

半径一キロ内にいる気配を消している者の気配を感じ取る。

強化可能。

現段階レベル・1

他にも気配遮断とか結界破りとかあるけど、ざっと見ただけでも四

十個くらいはある。

「分かった？」

「うん。結構色々あった。それで、強化についてなんだけど」

「とりあえず何かクエスト受けない？そこに向かいながら教えるからさ」

「うん」

確かに止まって教えてもらうよりは、行動しながらの方がいいか。

＊

「強化っていうのは、そのスキルを使うことで、効果が上がったりすることだよ。

さっき、ギルドの人が使ってスキルは、使い込むことで人の年齢や魔力量を量ることもできるようになったり、結界の綻びを見破ったりできるようになるの。

魔法もこれに該当するけど、アミのスキルに何か魔法はあった？」

朱兎（アカウサギ）と言う魔物の討伐依頼を受けて、その魔物が主に生息している

ラパ森林に向かっている。

その途中で、スキルの強化について解説をしてもらっている。

「うん。二つあったよ」

「え？二つだけ？」

「うん。一つは至って普通の魔法なのかもしれないけど、もう一つがかなり物騒なこと書いてあったんだよね・・・ちょっと見てみて？」

カードのその魔法の名前と説明を表示してハクアに渡す。

「どれどれ？・・・え！？」

それを見た途端、ハクアは驚いたのか固まった。

本日二回目の硬直。

とりあえず元に戻るまで、ハクアを引っ張っていくことにした。

三十分位して、元に戻ったハクアに説明を求める。

「えっと・・・わたしもまだ少し混乱してるんだけど・・・」

「うん」

「この『ル・ノワール・ファン』って言う魔法はね？現存する魔法と歴史に残る魔法。
それら全ての魔法の頂点なの。
最強で最凶で禁断の魔法。
意味は『漆黒の終焉』」

終焉。

あれかな？

物語の終わりによく使われる、ＦＩＮて言葉のことなのかな？

正確な発音ってファンだったのかな？

まあ、いいか。

「この魔法の効果は、『無』。

ただそれだけ。

でも、それだけだから危険なの」

ハクアの声がいつになく真剣な物になっている。

「この魔法を受けた者及び物は、その存在の一切がこの世界から抹消される。親や友人、仲間。記録といった物から、全てが抹消され初めからいなかったことになる。
だから、禁断とされた。危険、なんて生易しい言葉で片付けられる

魔法じゃないから・・・」

＊

「レクレール」

唱えると翳した手から閃光がはしり朱兎を焼いた。

「終わりっと・・・」

焼けた朱兎から角を採って、依頼達成。

ル・ノワール・ファンの他にあった魔法、レクレール。

これは光属性の魔法の中では初級中の初級で、しかも全ての魔法の中で一番威力が低いらしい。

でも、魔法の威力は使用者の魔力に左右されるし、強化もできるから何も問題はない。

今ので朱兎くらいの魔物なら倒せるってことも分かったし。

「でも、普通ここまでの威力は出ないんだけど・・・」

ハクアはそう言っていたけど、あたしも魔法なんて物は生まれて初

めて使ったからね。

ついでに補足としてだけど、魔法は使う際に強くイメージをして使うと威力が上がったりするらしい。

他にも形を変えたり、軌道を変えたり、時間差で発動できたりとか。

「さて、帰ろうか？」

「うん」

袋に角を入れて、歩いて帰るのも疲れるから飛んで帰ることにした。

スキル全然使ってないな・・・。

＊

「確かに。こちらが報酬となります」

「「ありがとうございます」」

銅貨十枚を二人で五枚に分ける。

「これで依頼のことは分かったよね？」

「うん。あ、そういえばこの『D』ってなに？」

「ランクだよ。今わたしたちは一番したのDランク。依頼をこなしていけば勝手にポイントが加算されて、一定のポイントが貯まったら、勝手に上がっていって表示も変わるから、余り気にしなくていいよ？ちなみに最高ランクはS」

「そっか。それじゃ、宿に帰ろう？お風呂入りたい」

「うん」

「それじゃ、お姉さん。またよろしくお願いしますね？」

「え？あ、ええ！もちろん、またね？」

お姉さんに手を振って、ギルドを出て、あたしたちは宿に戻った。

お姉さん、嬉しそうだったけど、何かいいことあったのかな？

まあ、いいか。

お風呂、お風呂。

―魔法―（後書き）

亜「魔法とか街の名前って、どこかの言葉なの？」

作「フランス語だけど？」

亜「なんで、そこ選んだの？」

作「なんかフランス語って格好良く聞こえるじゃん？」

亜「まあ・・・分からないでもないけど・・・。それで？今回あたしが使ったレクレールってどんな意味？」

作「閃光って意味らしいよ？ル・ノワール・ファンは漆黒と終焉って言葉を合わせてみた」

亜「へ～。じゃあ、お風呂はなんて言うの？」

作「アンバン、だってさ」

亜「アンバンねえ・・・まあ、いいか。それじゃね？」

作「あいよ～」

―復習―（前書き）

亜「今回は特に何も起こらずに、ずっと説明だってさ」

ハ「また？多すぎない？」

亜「だから、今回の話で纏めて、次話は一気に十年後まで行くって。でしょ？」

作「ああ。ちまちま説明し過ぎたし・・・まあ、とりあえず今回で第一章は終わりってことだ」

亜「まあ、何でもいいけどね」

―復習―

宿のお風呂で体の疲れを取りながら、あたしはここまでに聞いた話を復習することにした。

まず、この世界は地球ではなく、名前はウルベリア。

魔物も魔法もドラゴンも存在する。

人間ももちろんいる。

そして、今日、ギルドの中をざっと見た時、耳がある人やしっぽがある人もいたから、多分種族というかそれが違う人たちもいる。

世界にはマナと言う酸素の様な物が循環していて、生物は全てそのマナを吸収して生きている。

そのマナを十五年の間にどれだけ取り込んだかによって、魔力量が決まる。

魔物はそのマナを長い間吸収し続けた生物が凶暴性を増したもの。

形は様々で、でも殆どが凶暴性を増すだけ。

そして稀に知性の高い魔物が生まれる。

現在、ウルベリアにいる魔物は全て、約五千年前に生まれたたった

一体の魔物から始まった。

次に魔法。

この世界の殆どの人が使えるけど、偶に使えない人もいる。

魔法の威力は内包している魔力によって変わる。

発動する際、よりハッキリとイメージを描けばそれを魔法に付加することができる。

形の変化の他に、あたしが使うレクレールなら軌道を変えたり。

発動時間をずらしたり。

そして、あたしが使えるもう一つの魔法。

ル・ノワール・ファン。

意味は漆黒の終焉。

効果は、対象の存在をこの世の全てから抹消するという物。

記憶・記録の全てから。

最強で最凶で禁断とされる魔法。

さっきハクアが言っていたけど、魔法は鍛錬を積めば習得できるら

しい。

他にも魔導書や人に教えてもらったりとかしても・・・。

次にギルドとスキル。

ギルドは二人以上で登録して、その際にギルドカードを受け取る。

そして、依頼を達成することでお金やアイテムをもらうことができる。

依頼を達成していくと、カードにポイントが貯まって行き、一定値に達したら勝手にランクが上がっていく。

今、あたしとハクアは最低ランクのDで、最高はS。

カードの表には名前とランクが表示され、裏にはその人が持つスキルが表示される。

どちらも任意によって一部だけを表示したり非表示にすることができる。

最後に契約者。

これもあたしが持つスキルの一つ。

ドラゴン・精霊・魔具。

だれか、またはどれかと契約した物が得るスキル。
このスキルに効果と呼べる物はない。
強いて言うならスキルを得る為のスキルだろう。
千里眼や地獄耳、絶対嗅覚。
そして龍燐は多分、契約者から得た物。

「ざっとこんな所かな・・・」

簡単にだけど、自分なりに纏めていれば思い出すのも楽だろう。

「ハクア・・・あたし以外の契約者って今も生きてるんだよね？」
「うん。そうだけど・・・どうかしたの？」
「ううん。単にどこに住んでるのかな・・・って思って」
契約しているってことは、あたしたち同様に死なないんだろうから、今もどこかで暮らしているんだろうなって思ったけど・・・どんな所に住んでるんだろう？
「説明ができる場所じゃないね・・・。地図にも載ってないし、仮にその場所にたどり着いたとしても、家を見つけることはできない

よ。
同族か同族と契約した者にしか感知できないから」
「そうなんだ。でも、あたし何も感じないよ？」
「それは単に近くにいないからだよ。世界を回っていれば、その内見つけられるって」
「それもそっか・・・。それじゃ、上がろうか？のぼせちゃうし」
「うん」
お風呂から上がって、体を拭き着替えようとして服がないことに気付いた。
買っておくべきだったか・・・。
と思ったけど、予備の為なのか、着物の様な物がタオルと一緒に畳まれていた。
なんであるんだろう？
「まあ、いいか。ハクア、帯結んで？」
「はいは～い。次はわたしもよろしくね？」
「うん」

あたしの着物は赤い布地に花の刺繍が施されている物で、ハクアの方は黒い布地に水玉模様が入っている物。

「よく似合ってる」

「そう？アミも似合ってるよ？」

「そうかな？」

着物なんて向こうにいた頃は殆ど着たことないし、それだってうんと小さな頃だったから、あたしは全然覚えてないんだよね・・・。

写真で見たことはあるけど、似合っているとは思わなかった。

その後、バイキング方式の夕食を食べて歯を磨き、同じベッドに二人並んで寝転がった。

「明日あたり、装備を揃えようか？この着物だってずっと着てる訳にはいかないし」

「そうだね。いくら譲ってくれたからって、ずっとは無理だし」

女将さんが、よく似合っているから譲るわ、と言ってくれたので好意に甘えてもらうことにしたけど、成長したらサイズが合わなくなるだろうし・・・。

（成長すればね？）

「は！？」

「っ！どうしたの？アミ」

「あ、いやなんでもない。ごめんね？」

なんか不穏な発言が聞こえて声を上げると、ハクアを驚かせてしまった。

「それないいけど・・・。じゃあ、お休み。アミ」

「うん。お休み。ハクア」

目を閉じると、すぐに睡魔が襲ってきて、すんなりと眠ることができた。

明日からも頑張って行きましょうかね。

―復習―（後書き）

亜「それで？どういうこと？」

ハ「どうしたの？アミ」

亜「こいつが不穏なこと言ったの！成長しないような感じのことを！で？どうなの！」

作「さ～て。どうk「心配しなくても、ちゃんと成長するよ？」ちょ！ハクア！」

ハ「なに？本当のことだよ？」

亜「良かった～・・・」

作「チッ」

亜「今舌打ちしたでしょ？」

作「いや？」

ハ「まあ、いいじゃない。それじゃ、次は十年後で～す！」

作「あ、勝手に終わられた！」

亜「へへ～ん。ざまあみろお！」

作「なんだと！」

亜「やるか！？」

ハ「勝てないと思うけどなぁ・・・作者。まあ、いいか」

―魔具―（前書き）

亜「十年ってこんなに早かったっけ？」

作「契約したからだろ？こっちでは一日も経っていないって」

亜「いや、あんたのとこの時間経過なんてどうでもいいよ」

作「冷た」

ハ「あはは。まあ、作者の言うとおり、契約したから時間の感じ方が変わったんだよ。人間と同じように時間を感じてたら、とっくに生きるのに飽きてたと思うよ？」

亜「確かにそうだよね・・・。これなら百年とかも一瞬なのかな？」

ハ「そうかもね。でも、そんなの気にする必要はないし、気ままに行こうよ？」

亜「うん」

―魔具―

「ありがとうございました。お待たせ、ハクア」

「ううん。こっちもついさっき終わったし。それで、この後どうする？」

ウルベリアに着て十年の月日が流れた。

あっという間だったし、色々あったな・・・。

とまあ、感傷に浸るのは止めておいて、今日はギルドで健康診断が行われた。

五年以上同じ街に止まって活動している人は、その街のギルドで健康診断を受けないといけなかったらしい。

ハクアもこれは知らなかった見たいんだよね・・・。

というか、なんの説明もされなかったし。

診断結果は至って健康とのことだった。

身長は百五十八？まで伸びて、体重も丁度いいくらいだったし、良かった良かった。

髪も結構伸びて、腰の下まで来たからツインテールにしている。

和服にツインテールってどうなんだろう？

ハクアは似合ってるって言ってくれたから良いけど。

着物は、もらった次の日に女将さんから聞いて分かったけど、魔具だったんだよね・・・。

保持者の成長に合わせて自動的にサイズも変わっていくっていう物で、女将さんが人様に上げるんだから危険がないか確認しておかないと、と言ってギルドのおじさんと同じ見破るスキルを使って視た所、魔具だということが発覚した。

契約をしなくても着ることはできるけど、折角だから契約した。

ちゃんと翼用の穴も開けている。

「とりあえず何かクエスト受けよう？Bランクになってるから、大体の物は受けられるし、街にいても暇だし」

「そうだね。黒獣（コクジュウ）でも行こうか？」

「オッケー」

ハクアも背が伸びて、あたしより大きくなった。

と言ってもほんの二三？だけど・・・その差が結構大きいんだよねぇ・・・。

髪型はお下げ？

二つに分けて前に持ってきた髪を、首もと当たりで結んでいるんだけど、風呂上がりの格好にしか見えないし、桶とかもってたらそうにしか見えないと思う。

ちなみに武器についてだけど、あたしは『妖刀・ムラマサ』でハクアは『霊銃・ル・フュズィ』ていうんだけど、これまたどちらも魔具なんだよね・・・。

契約もばっちりしております。

加えて、二人とも自我を持ってるんだよね・・・。

それは良いんだけどね・・・

『おいアミ！黒獣なんてまだお前には早い！もっと安全な奴にしとけ！あ、いや！それもやっぱり駄目だ！採取にしておけ！それなら命の危険はないからな！正し断崖絶壁の場所とかは止めろよ！落ちたら危ねえからな！』

この心配性はいい加減にして欲しいな・・・。

ちなみに男です。

『ムラマサはん？アミはんもハクアはんも強うなってますさかい、黒獣くらいなら問題ありません。それに、既に何度か倒していらっしゃいますやろ？』

こっちは女で、正しいのかどうか分からないけど関西弁、多分京都より？で話す。

初めて会った時も思ったけど、この二人って武器が逆の方がしっくり来てると思うんだよね・・・まあ何となくだけど。

「そうだよ。それに、二人ともわたしたちの正体知ってるんだから、問題ないこと位分かってるでしょ？」

『それはそうだけどな？やっぱ心配なもんは心配なんだよ』

「心配してくれるのは嬉しいけど、されすぎると疲れるの。あたしそんなに信用ないの？」

『あ・・・いや・・・』

少ししょげてしまったのか、ついさっきまであった勢いが無くなった。

鞘ごと腰から抜いて、抱きしめる様にムラマサを持つ。

「誓ったでしょ？あなたの契約者として恥じない様になるって」

『アミ・・・・・そうだな。悪かった』

「ううん。あたしもごめんね？心配してくれたのに」

『ああ』

心配してくれるのは、それだけあたしのことを思ってくれているからだってことは十分分かってる。

八年前に契約した瞬間から、ムラマサはあたしの心配をしていたし、それからずっと心配しないことがなかったから。

心の中でもう一度お礼を言って、ムラマサを腰に戻す。

『羨ましいどすなぁ・・・ハクアはん？うちも抱きしめておくれやす』

「うん」

膝に置いていたフュズィを抱きしめるハクア。

頬笑ましいなあ・・・。

『あ、そうだ。アミ、黒獣と戦うのもいいが、その前にウォーミングアップくらいしておいたらどうだ？念には念を入れてよ』

「それもそうだね。ハクア、フュズィ？そういう訳だから、よろしく」

「うん」

『ええ』

＊

ニュアージュを出て、誰にも迷惑がかからない場所でムラマサの柄

に左手を添え、フュズィを構えているハクアと向かい合う。

やることは至って単純。

ハクアが撃ってきた魔弾を居合いで斬る。

それだけ。

放たれた魔弾が眼前まで迫った所で、全身の力を一瞬抜いてムラマサを振り抜きまた鞘に戻す。

鍛錬とハクアとの契約の恩恵もあるお陰で、八年でここまではできる様になった。

「ふぅー・・・」

ゆっくり息を吐いて、体の緊張を解いていく。

「よし。終了。行こうか？」

『おう』

「うん」

『ええ』

「さ～て、黒獣討伐へレッツゴー！」

「『『おー！』』」

―魔具―（後書き）

ム「よう！初めましてだな！アミと契約した魔具。『妖刀・ムラマサ』だ！んでこっちが！」

フュ「ハクアはんと契約した、『霊銃・ル・フュズィ』どす」

ム「本編の中じゃ、武器だが、ここでは人の姿だ。俺もフュズィもアミ、ハクアと同じく和服だ。フュズィは白い布地に、朱で模様が入ってんだ。髪も朱だぜ？目の色は、いつも閉じてるから分からねえ・・・」

フュ「閉じてません。これでもちゃんと開いてます」

ム「マジか？」

フュ「マジどす。さて、そろそろ戻りませんと、二人とも戻ってきますえ？」

ム「別にバレてもいいと思うけどな・・・ああ、分かってるよ。でも、あの二人なら本当にいいとも思ってんだ。お前だってそうだろ？」

フュ「それは・・・」

ム「まあ・・・これまでのことを考えたら難しいと思うけどな？」

フュ「・・・・・・」

―最期―（前書き）

亜「今回あまり出番ないの？」

作「いや、ちゃんと出るよ？語りが別の奴になってるだけで」

亜「別の奴って？ハクア？ムラマサ？フュズィ？」

作「見ていれば何となく分かってくるよ。というかすぐに分かる」

亜「？」

―最期―

ニュアージュという街の近くに棲み着くようになり、五年の時が過ぎた。

今まで何度か、我を倒そうと挑んできた者がいたが、どいつもこいつもまるで話にならない様な奴らだった。

最初は少し遊んでやろうと力を抜いていれば、いい気になるが、ほんの少し力を入れて掛かればなんのことはない。

一瞬で片が付く。

本当につまらない・・・何故我はこんな所に来たのだろうか？

退屈ならばどこか別の場所に行けば良いだけのことだが、どうしてか此処を動けずにいる。

まるで本能が此処にいろとでも言っているかのように、我はこの地から動けずにいる。

何だと言うのだろうか？

漆黒の毛に覆われた体の毛繕いをしながら、その理由を考えていたが、しかし答えは見つからなかった。

当然と言えば当然か。

三年前からこのことについて考えない日はなかったが、答えは見つかっていないのだ。

それが突然今日見つかるわけもない・・・。

その時だった。

縄張りに二人の人間が踏み込んできたのは。

まだ我の元までは来ていないようだが、気配だけでも強者だということは分かる。

真っ直ぐに進んでくればほんの三十分程で辿り着くだろう。

念のためにも準備だけはしておこう。

今までの相手が弱かったからと言って、今日も弱い奴が来るとは限らない。

四本の足で体を起こし、固まっていた体を解す。

この瞬間は何とも言えぬ快感があるな。

適当に当たりの魔物を狩りながら、二つの気配が近づいてくるのを感じ、先ほどいた場所に戻った。

それから約十分程が経った頃、その二つの気配は姿を現したが、その二人を見て我は些か驚いた。

「いた」

「アミ？気を抜いたら駄目だよ？」

二人ともまだ年端もいかぬ少女だったのだ。

身の丈は我と比べれば、あちらからしたらおよそ三倍はあろうに、真っ直ぐに我を見据えている。

こんな者たちは初めてだ。

おそらく他の人間達が見れば、この二人の持つ力には気付かないだろう。

黒い着物を着ている少女の、気を抜くなと言う言葉。

これは我にも当て嵌まる。

この二人には本気で掛からねばならぬ。

本能がそう告げている。

「分かってる。行くよ？ムラマサ」

もう一人の赤い着物を着ている少女が、腰に差している剣の柄に手

を掛け戦闘態勢を取った。

黒い着物の少女も太股に巻いているホルスターから銃を抜き銃口をこちらに向け、牽制の弾を撃ってきた。

それを避け今度はこちらから攻撃を仕掛ける。

二人に急接近しその身を引き裂こうと爪を振り下ろすが、それは躱され地面を抉るだけに終わった。

だが、こちらも躱されたままで終わるつもりはない。

前脚を軸に体を回転され、尻尾を降る。

「アミ!?」

「大丈夫!」

アミと呼ばれた少女がそう言った通り、尻尾は片腕に防がれた。

だが、勢いを殺すことはできなかった様で、少女の体は地面に叩きつけられた。

それにしても、何だ?今の感触は?

とても少女が持つ固さとは思えなかった。

どころかあの腕で殴られでもすれば、我とて致命傷を覚悟せねばならぬ程だ。

土煙が晴れた時、そこには今し方吹き飛ばした少女が立っていた。
まるで堪えてないようだ。
「居合い術一式・一ノ型――――」
少女が最初の時の様に柄に手を掛ける。
来る。
「陽炎（カゲロウ）」
ヒュヒュン！
空を切る音が二度聞こえた次の瞬間、我は本能的に跳躍していた。
何故だ？
あの者の攻撃は届かない位置にいた。
剣の届く範囲にいなかったにも関わらず、何故我は跳んだ？
ズシン！
背後で音を立てて何かが倒れた。
見てみると、我の後にあった木がスッパリと切られていた。
だが、可笑しい。

音からして、あの者が二発の斬撃を放ったのは明らかだ。
だというのに、木は一度しか切られていない。
その答えは、直後に分かった。
「ガアッ！」
腹のあたりを何かが斬り裂いたことによって。
時間差で二発目の斬撃が襲ってきたのだ。
なんとか地面に降り立つが、横腹からは血が溢れ、ふらついてしまう。
この瞬間、決着は着いた様な物だ。
だが、このまま終わっては余りにも呆気ない。
せめて最後の足掻きはさせてもらう。
力を振り絞り、アミと言う少女に接近する。
その時、また少女が剣を構えた。
「居合い術一式・奥義――――」
おそらくこの一撃で我は終わるだろう。
だが、構わない。

我がこの場を動けなかった理由。

それがこの者だったのだから。

「未開紅（ミカイコウ）！」

音も聞こえぬ程の早さで、少女は剣を振り鞘に戻した。

斬られたと言う感覚すらも・・・我には無かった。

攻撃しようと振り上げていた爪をゆっくりと下ろし、少女を素通りし、後を見ると少女も同じようにこちらを見ていた。

そして

キン

刀身が全て鞘に収まった時、我は終わったと同時に願った。

この者の側にいたい、と――――

―最期―（後書き）

ハ「出番が全然無かった」

作「いや、ごめん・・・次からはまた出番あるからさ、そう落ち込むなって」

ハ「本当？」

作「本当だよ」

ハ「なら許す」

作「サンキュ」

―予感―（前書き）

ハ「今回はどんな話？」

作「適当にブラブラする話。後は、もしかしたらなにかハプニングに巻き込まれるかも知れない様な気がする」

亜「アバウト過ぎでしょ」

作「和服で刀持ってて、ツインテールって可笑しくね？」

亜「しろって言ったのあんたじゃん！」

作「そうだけどさ・・・やっぱ・・・なんかミスマッチな気がしてさ」

亜「分かってるよ！だから嫌だったよ！」

ハ「それって、単に戦う時もその髪型だからじゃない？」

亜・作「？」

ハ「だから、戦う時は気分を変えるっていうか、戦闘モードっていうか、髪型を変えればおかしくないんじゃない？」

作「あ～・・・じゃあ、ポニーテールでいい？」

亜「またあんたが決めんの？まあ、ツインよりはやりやすそうだからいいか」

作「なあ、ハクア。前からアミってなんか俺に対して冷たくないか？」

ハ「あはは・・・」

―予感―

ムラマサを納める直前、黒獣があたしの方を見たけど、その目に敵意は込められていなかった。

では何だったのか？

それは、あたしには分からなかったけど・・・。

どうしてだろう？

この子とは、また別の形で会う気がする。

何年後か、何百年後か・・・もしかしたら何千何万と掛かるかも知れないけど、どこかで。

そんな予感めいた物を感じながら、ムラマサを完全に鞘に収めると同時に黒獣の巨体がぐらりと大きく揺れて、大きな音を立てて倒れた。

程なくして、体がマナとなって世界に還っていく。

そしてそこには黒獣の牙が一本残った。

＊

「良かったの？」

「うん。これは大事に持っておきたい」

「そっか」

この牙は黒獣を倒した証明としてギルドに提出しなければならないけど、見せるだけでも報酬を受け取ることはできる。

本来の半分以下になってしまうけど。

だから今回は、銀貨六枚だったのが、三枚になってしまった。

「ハクアこそ良かった？報酬少なくなっちゃって・・・」

「いいっていいって」

「・・・そっか。ありがと」

「ううん。でも、お姉さんとおじさんは何かあるって思ってるかも知れないね？」

ハクアの言う通り、おじさんとお姉さんは何があったのかをしつこく聞いてきた。

いや、この言い方は少し悪いけど、あの二人は十年間ずっとお世話になってるからね・・・。

あたし達の初めての行動に少し驚いているのかも知れない。
今まで提出をしなかったことなんて無かったかし、少なくともこの街で提出をしなかったのは、あたしが初めてだから、尚更に・・・。

「そうかもね」

「ねえ、どうして提出しなかったの？理由、あるんだよね？」

『うちも気になります』

『俺もだ。教えてくれねえか？』

「もちろんそのつもり。だけど、まずはお風呂入りたいから、その後でもいい？」

「あ、そうだね・・・お腹も空いたし」

『そういや、もうすぐ陽が落ちるな』

空を見てみると、ムラマサの言う通り空は暗くなっている。
後数十分で、この街にも夜の帷が降りるだろう。

宿に戻って女将さんに挨拶をして、お風呂に入りごはんを食べて部屋のベッドで並んで座る。

「あたし自身、どうして分からないんだけどね？この子とはまた会

うような気がして・・・」

『この子って・・・黒獣か？』

「うん。あの子が最期にこっちを見たの、ムラマサ達も見たでしょ？」

「あ、そういえば見てたね？」

『それがなにか？』

なにか、って聞かれたらあたしにも分からないけど・・・。

「分からないけど・・・何か予感、みたいな物をね？感じたの」

「予感・・・アミ、カードを見てみて？」

「え？どうして？」

「いいから」

ハクアに言われて、カードを取り出し表示を出して裏を見てみる。

けど

「何も変わってないよ？」

どこにも変化は無かった。

スキルのレベルが上がった訳でも、新しいスキルが追加された訳でもない。

本当に何も変わってない。

「え？ホントに？」

「うん。ほら」

カードをハクアに渡して確認させる。

「・・・ホントだ」

「ね？何か気になることでもあるの？」

返してもらったカードの表示を消して、しまいながら聞くと、ハクアは新しいスキルが追加されていると思ったといった。

そのスキルの名前は『未来予知』。

文字通り、未来のことを予知するスキルでごく稀に手に入れる人がいるらしい。

でも、まだ誰も手に入れていない様で、殆ど伝説と化しているスキルだとか。

「まあ、いいんじゃない？それに、あたしはそんなスキルいらないよ」

『なんでだよ？先に起こることが分かるんだぜ？』

「だってつまらないし」

『「『え（は）？』」』

三人とも同じ反応を返してきた。

「だってさ・・・もしあたしがそのスキルを、ムラマサとフュズィに会う前に持ってたとしたら、まるで初めから出会うことが決められてたみたいじゃない？初めから決められた出会いなんて、あたしは嫌だな・・・」

折角あえてもそれが、決められていたってことなら、喜びもしないと思う。

「最初から全部知ってたらさ・・・確かに面倒なことや危険なことを避けて生きることができるけど、それはあくまでそういうことが起きるってことが分かるだけで、その先に起こることは分からないんだよ？」

「その先？」

復唱したハクアに頷きで返して、あたしの考えを話す。

「ハクアと初めて出会った時は、スキルなんて物は持って無かったし、たとえ持っていたとしてもあたしにそれを確かめる術は無かった。前にも言ったけど、あの時はハクアに食べられると思ったんだよね・・・」

『そういえば、そんなこといっとりましたなあ？』

今では良い思い出だけどね。

「あの時のあたしにとって、あれは間違いなく危険なことだった。でも、それは本当は全然危険なことじゃなくて、ハクアはあたしを助けてくれた。そこから全部始まったんだよ？目を覚ましたらハクアがいて、契約して、百年も寝ちゃって」

『未だに信じられねえよな？お前が本当は百二十六歳のババアなんてよ』

「うるさい。精神的にはまだまだ子どもなの」

実年齢でも確かに二十六歳にはなってるけど・・・。

「まあ、そこからこの世界。ウルベリアのことを教えてもらって、魔物やマナ、ギルド、精霊、魔具、契約者。色んなことを教えてもらってさ・・・ギルドに登録して、その二年後にムラマサとフュズィに出会ってさ・・・その全部を予知していた、なんてことは無いんだろうけど、いくつかの出来事は予知してた訳でしょ？」

「うん、多分」

「もしハクア達が、あたしだっとしたらそれを楽しいと思える？」

『「『ぁ』」』

「でしょ？まあ、そういうことだよ。この世界でのあたしは、危険

なことから始まった。いきなり空に放り出されたんだよ？危険でしかないって・・・でも、そこでハクアに出会って、そこから全部が始まった」

女将さんとの出会いもお姉さんとの出会いもおじさんとの出会いも。

この着物に、ムラマサとフュズィ。

今日の黒獣。

「大変なこともちろんあったけどさ・・・ハクアたちがいたからね。楽しかった」

もし、あのまま落ちていて、何かの偶然が重なって無事だったとしても、訳も分からないまま終わってたと思う。

一人でこの世界を回るなんて、到底できっこなかっただろう。

「ありがとね？あの時助けてくれて」

「・・・それ、何度も聞いたよ？」

「いいじゃない？本当に感謝してるんだから」

笑いながら言うハクアに、あたしも笑いながら返す。

「ムラマサとフュズィに逢えたことも、本当に嬉しかった。最初は心配し過ぎだな、と思ったけど、それも全部優しさから来てるんだもんね？

ありがとう。いつも心配してくれて」

抱きしめて、改めてお礼を言う。

これからもムラマサはあたしの心配をするんだろう。

そして、また心配し過ぎだって思う。

でも、それが優しさだってことを、あたし達は知ってる。

「これからもよろしくね？」

『おう！任せとけ！』

頼もしいパートナー。

着物にも自我があればいいのにな・・・。

そのうち芽生えたりするのかな？

でも、今はこのままでもいいか。

「ハクア達も、これから先もよろしくね？」

「『もちろん（どす）』」

「フフ」

本当に良かった。

あの時、ハクアに出逢えて。

＊

ハクア達が眠った後もあたしは少し起きていた。

持っているのは黒獣の牙。

それを両手で包み込んで、胸元に持ってくる。

眠気もあったから、気の所為かも知れないけど牙が少し震えた気がした。

楽しみにしてるからね？

また出逢える日を――

―予感―（後書き）

亜「ハプニングなんか起きてないじゃん」

作「かも知れないって言ったろ？俺だって先のことなんて分からないって」

亜「はあ・・・まあ何もないならそれで良いけどね。それで、ちゃんと黒獣とは逢えるの？」

作「言ったら楽しくないだろ？お前が言ったじゃんか」

亜「・・・それもそっか。楽しみにしてるからね？」

作「・・・・心配しなくてもいいさ・・・」

亜「え？何かいった？」

作「いや」

亜「そう？まあ、いいけど。それじゃ、あたしは戻るから」

作「おう。またな？」

亜「ええ」

―休日―（前書き）

ム『一ヶ月後』

ハ「え？何が？」

フュ『今回は前話から一ヶ月後の話らしいどす』

ハ「ああ。それで、何かあるの？」

作「いや、特に何も起きないよ。多分」

ハ「多分って」

ム『またアバウトだな』

作「そういや、アミは？ここにいないの初めてだけど」

ム『ああ。まだ寝てるよ』

作「珍しいな？いつもはもう起きてんのに」

フュ『まあ、ええやないですか。アミはんはうちらの中では一番子どもなんですから』

ム『だな』

―休日―

黒い小さな犬が夢に出てきて、あたしはその子とじゃれ合っていた。
抱き上げると、頬をなめられてくすぐったくて、あたしもおかえしと言わんばかりにその子のお腹を撫でたりして。
夢なのに、とても現実感があって、なんだか不思議だった。
暫くすると、犬が急にそっぽを向いて駆けだしていった。

『あ！まって！』

呼び止めると、犬はチラリとあたしを見て

『ワン！』

と一声吠えて、走り去っていった。

「待って！」

「ひゃっ！」

「え？あ、ハクア・・・」

起きると、誰かの驚く声が聞こえて、見てみるとハクアが髪を整えていた。

おはようと、挨拶するとハクアも返してきて、どうしたのか聞いてきたけど、あたしも分からなかった。

でも、何か夢を見ていたことは覚えてる。

「最近多いね？飛び起きるの」

確かに・・・黒獣を倒してから今日までの一ヶ月。

あたしは今日の様に飛び起きることがよくある。

「何か心当たり、ある？」

「・・・多分、夢だと思う」

「夢？」

「うん。内容は覚えてないけど・・・今日みたいに起きる時は、必ず夢を見てる」

「嫌な夢？」

「ううん。そんな感じはしない」

「そう・・・それならいいけど」

心配してくれるハクアにお礼を言って、ベッドから降りて洗面台へ向かい、歯磨きと洗顔を済ませる。

「ムラマサ、フュズィ、おはよう」

『おう』

『おはようございます』

「準備できた？」

「うん」

着物を着て、髪をポニーテールに結び腰にムラマサを提げ、首から黒獣の牙を提げて、着物の下に入れる。

ハクアもホルスターを左足の太股に付けて、フュズィを差し込んで準備完了。

下に降りて、女将さんに挨拶をした後ごはんを食べて、ギルドへ向かう。

「今日はどうする？」

「う～ん・・・今までしてなかったけど、長期のクエスト受けてみようかな？いい加減他の街も見に行きたいし・・・。いい？」

「いいよ」

ハクアは二つ返事で了承してくれた。

と言うわけで、あたし達は今日初めて長期クエストを受けることになった。

長期クエストって言うのは、他の街までの護衛だったり探索に時間が掛かるエリアでの討伐・採取依頼のことを言うんだけど、これまでの十年間、なんとなく受けられずにいたんだよね・・・。

本当に何となく・・・。

「それで、どれ受ける？ラ・メールまでの護衛依頼にル・スィエルでの魔物討伐協力者依頼か・・・初めてだし、まずは簡単な物で慣れておいた方がいいと思うよ？」

「そうだね・・・。ル・スィエルの方が近いんだよね？」

「うん。ラ・メールより一ヶ月くらい早く着く」

「じゃ、護衛依頼の方にする。折角遠くまで行くんだから、途中で色々見たいし」

「分かった」

お姉さんの所に紙を持って行って、依頼を受ける手続きを済ませる。

「あら、珍しいわね？あなたたちが長期依頼なんて」

「はい。今まで受けてなかったら受けてみようと思って」

「そう。気を付けるのよ？」

「「はい」」

お姉さんといつの間にか出てきていたおじさんに手を振って、ギルドを出る。

「出発は明日だから、今日はゆっくりしてようか？」

「うん。そういえば、他にこの依頼を受けた人達ってどんな人なんだろうね？」

「まあ、気にはなるけど、明日になれば分かるからいいんじゃない？」

「それもそっか」

『変な奴がいないといいけどな・・・』

『その時はうちが斬ります』

フュズィが何か物騒なこと言ってたけど、とりあえず気にしないことにした。

―休日―（後書き）

亜「何も起こらなかったね」

ハ「偶にはいいんじゃない？」

作「そうそう。次話ではやっと他の街に向かうからな」

亜「どんだけ遅いのよ、って感じだけどね・・・」

作「うっせ」

ハ「あはは」

―才能―（前書き）

ハ「今回は何か起こるの？」

作「ああ、夜にちょっとな」

亜「夜？危ないことじゃないでしょうね？」

作「お前は何が起こったとしても危険は無いだろ？スキルがあるんだし」

亜「分かってるわよ。ハクア達がってこと」

作「護るだろ？」

亜「・・・急に真剣になるな！」

作「あいたす！」

ハ「ふふ」

―才能―

翌日、準備を済ませ、女将さんに暫く帰ってこないことを伝えてから街の出口に向かった。

そこには既に馬車と他にこの依頼を受けた人が集まっていて、あたし達が最後みたいだ。

少し急いで挨拶をしながら近寄ると、銀色に黄色い装飾の入った鎧を着けている青い髪の青年がにこやかに挨拶を返してきてくれた。

この人を含めて、今回の依頼を受けた人は五人。

あたしとハクアに、この青年と青年の腰にくっついているドレスタイプの服を着ている水色の髪の少女に、肩に白梟（ハクキョウ）を乗せている金髪ストレートの甲冑を着ている女の人。

青年も女性も見た目二十歳くらいに見える。

少女は、多分十歳くらいかな？

目がくりくりしてて可愛い。

「あたしは、アミ・タカマチです」

「わたしはハクアです」

「あたしたち、二人ともBランクです」
「ほう大した物だな？オレはライト・ハーツェルン。ランクはAだ。あいつもな？」
ライトさんはそう言って、後にいる女性を指した。
こちらを振り向き、女性も名を名乗る。
「ノエル・ハーツェルン。Aランクだ」
ハーツェルン？
はて、と思いライトさんを見上げると、それに気付いたライトさんが納得したように笑顔を讃えて答えてくれた。
「ああ、オレたちは夫婦なんだ。で、こいつは俺たちの娘」
「よろしくね？」
「っ」
「おっと」
女の子は人見知りするタイプなのか、ライトさんの、お父さんの後ろにさっと隠れて、顔だけ出してあたしを、いや、正確にはムラマサを見た。
もしかしたら魔具だってことに気付いているのかも知れない。

そうだとしたら、この子は凄い。

着物と契約してからも、ムラマサとフュズィに会ってからも、この子達が魔具だと気付く人はいなかった。

おじさんもスキルを使ってやっと気付いたのに。

将来が少し楽しみだな・・・。

「そろそろ時間だよ？」

ハクアに言われて、あたし達は挨拶もそこそこに馬車に乗り込んだ。

＊

今回護衛するのは、行商人では無く品物。

なんでも高価な物の様で、ラ・メールのとある貴族に渡せば依頼完了。

報酬は一人につき、金貨二枚。

さすがは貴族とでも言うべきか、お金だけはあるらしい。

御者はハーツェルン一家が引き受けて、あたし達は荷物の載っている荷台に乗っている。

『あいつ、俺に気付いてたな』

「だろうね。ハクアも気付いた？」

「うん。アミを、って言うより、ムラマサを見てたからね」

『うちは何も見えませんでしたが、何か微弱な力は感じました』

「それって、あの子自身も気付いてないよね？」

『はい』

『よく分かったな？』

「気付いてるなら、多分すぐに言ってると思うよ？少なくとも、両親には言うと思う」

でも、あの子は何も言っていないし、馬車に乗ってからも言ったような様子は無い。

見えないから分からないけど、言ったとすれば、ライトさんかノエルさんのどちらかが聞いてきても不思議は無いだろう。

まあ、聞いても特に気にしてない、ってこともあるだろうけど・・・。

それにしても、あの白梟も凄いな。

魔力が半端じゃない。

あれだけの魔力を持っている白梟を従えているノエルさんもさすがAランクになるだけはあるってことなのかな？

ノエルさんだけでなく、ライトさんも魔力はかなりものだけど、ノエルさんよりはいくらか劣っている。

でも、それよりもなによりも・・・あたし達を除いて、この場で一番強い力を秘めているのはその二人の愛娘だ。

二人の魔力を今の段階で凌駕している。

それを意識的になのか無意識的なのか、抑えているから二人も気付いていないんだろうけど・・・。

白梟まで欺くなんて、かなりの物だ。

それも少女が持っていても、自覚していないスキルなのか。

それとも天性の物なのか分からないけど、どちらにしても魔物まで欺くなんてことは熟練した戦士でもできる人は数える程しかいないだろう。

あたしとハクアは力を隠蔽できるように訓練したからだけど、それも契約者の恩恵があったから。

もし無い状態でそれをできるようにしようとしていたら、何年かかったか・・・。

馬車は問題なく進み、魔物の襲撃もないまま最初の野営地に到着した。

いや、勝手に決めてるだけなんだけどね？

簡単な魔物除けも兼ねて火を熾し、夕食を食べる。

「今朝はすまなかったな？こいつはレイユ・ハーツェルンだ」

ライトさんが食べていた肉を飲み込んで、言ってきた言葉にあたしは気にしてないと返す。

それよりも、見た目子どもにしか見えないあたし達が来て不安じゃなかったのかを聞くと、レイユちゃんも戦う力を持っているから不思議じゃない、とのこと。

ごはんを食べ終わり、夜の見張りをライトさんとハクアがすることになって、あたし達は馬車に最初からあった毛布を掛けて眠った。

＊

眠りについて約二時間後。

背後の茂みでいくつかの気配が動いた。

まだ攻撃を仕掛けてくるつもりは無いらしい。

ハクアかライトさんのどちらかが油断するのを待っているんだろう。

結構な力を持っているようで、レイユちゃんの魔力に気付いていながらも狙っている。

他の気配はおそらく部下の様な物だろう。

それから、更に約三十分後。

小さな気配が音を立てることなく動いた。

飛びかかってくるそれをムラマサで両断する。

「敵が来たよ！」

「何体！」

「五体！その内の一体は結構強いよ！ライトさんはノエルさんとレイユちゃんを護ってください！」

「え？あ、ああ！」

いきなりのことに反応が遅れながらもしっかり剣を抜き、起きたレ

イユちゃんを抱いているノエルさんの前に立つライトさん。

それを確認して、また新たに飛びかかってきた一体を今度はハクアが撃って撃退した。

あたしもムラマサの柄に手を当て、構えを取る。

「さて、夜の狩りを始めるよ――――」

―才能―（後書き）

亜「あたし、こんな猟奇的だった？」

作「少し眠いからテンションが可笑しくなってるってことで」

ハ「いいの？そんなんで」

作「多分。ちなみに、寝ていたのに分かったのは、アミのスキル『半寝の居（はんしんのきょ）』の効果」

亜「詳しくはまた次話で」

ハ「それではお休みなさい」

―性質―（前書き）

作「あと二、三話は移動に使うかも」

亜「いや、そんなに使わなくてもパッと行けばいいじゃん」

ハ「アミ、その発言はちょっとどうかと思う」

作「亜美の言う通りだけど・・・戦闘にね？今回で終わるには終わるんだけどさ・・・後何度か・・・ね？」

亜・ハ「あ～・・・」

―性質―

先に襲ってきた二体が殺られたことで少し様子を見ることにしたのか、残りの奴は中々攻撃を仕掛けてこなかった。

それならそれで良い。

結界を張ることもできるし、巻き添えを食らってくれたら尚結構。

「さて、いくよムラマサ」

あたしの呼び掛けにムラマサはあたしにだけ聞こえる声で返事をした。

「居合い術三式・二ノ型――――界（カイ）」

半径十メートルに斬撃をいくつも飛ばし、その場に留まらせる。

これでこの斬撃分は敵がいても大丈夫。

陽炎と同じようにレクレールを斬撃化しているから、敵が近づいたら勝手に飛んでいってくれる。

それに、親玉は逃したけど、一体に傷を負わせ一体を仕留めることができた。

流石にこれを全部かい潜って来る、なんて無謀なことはしないと思

うけど

「アミ！」

「分かってるって！」

それは殆ど、向こうが単体の時に限られる。

今は負傷しているとは言え、部下がいるんだからそいつを使えばいい。

おそらく親玉の命令で、先ほど負傷した魔物が飛び込んで来た。

勿論その魔物は斬撃にやられて、辿り着く前に息絶えた。

「ガアアアッ！」

そして、その後ろから迫ってくる大きな狼型の白い魔物。

黒獣と対の存在となる『白獣（ハクジュウ）』。

安易な名前と侮る無かれ。

個体によっては黒獣が束になっても敵わない程の力を持つ者もいる。

サイズも先の魔物とは違うから、他の斬撃も飛んでいくけど牙で噛み砕いたり爪で斬ったりと器用に斬撃を避けながら突っ込んできた。

「アミ！ノエル！」

「ええ！」

「大丈夫ですよ」

「「え？」」

危険だと思った様で、ライトさんとノエルさんが援護しようとしたのをハクアが制止した。

流石、分かってる。

ムラマサを縦に構え、逆手で柄を持ち目を瞑って神経を集中させ、

「居合い術一式・三ノ型――――」

「ガアアアアッ！」

音を立てることなくムラマサを一閃する。

「な！」

驚きの声を上げたのはライトさん。

多分ノエルさんも驚いているとは思うけど、あたしと白獣の位置が変わってるからって、そんなに驚くことでも無いと思うな・・・。

ズン、と音を立てて着地した白獣の足音を聞きながら、あたしはそんなことを思っていた。

「グルルルル・・・」

何かをされたのは確かになのに、自分の身体に異常が無いことを不思議に思っているのか、白獣は背後からあたしを威嚇していた。

そして、あたしが何もしないことを好機と思ったのか

「ガアア！」

飛び掛かってきた。

確かに何もしてないけど、あたしの攻撃は終わっていない。

「炎帝（エンティ）」

キン。

ムラマサを鞘に収めると同時に

「ギャオオオオオ！」

背後で白獣が炎に包まれ叫び声を上げた。

その後、程なくして白獣は跡形も残さず塵となって消えた。

＊

「あれは、半寝の居って言って、意識を半分だけ起こした状態で寝るスキル。だから、寝ながら考え事もできるし、修行だってできる。慣れさえすればかなり便利なスキルだよ」

白獣を倒した後、結界も張り直し安全な状態にしてハクア達の所に行くと、ライトさんがどうして寝ていたのに敵が来ることが分かったのかと聞いてきて、今それに答え終わった所。

「それじゃあ、あの界っていう剣術は？」

今度はノエルさんが聞いてきた。

「あれは、あたしが唯一使える術、レクレールを斬撃化して、周囲にばらまいてるの。敵を感知したらその方向を向いている斬撃が勝手に飛んでいって攻撃してくれるから、牽制には持ってこいの技」

「歩いたら斬撃もそれに合わせて動いてくれるから、いつでも安心だよ」

ハクアが補足説明をしてくれた。

「最後のエンテイって技は？レクレールしか使えないなら燃やすことなんてできないだろ？」

「できるよ？」

お。

答えたのはあたしでもハクアでも無く、レイユちゃんだった。

あたし含めみんなの視線がレイユちゃんに集まる。

レイユちゃんはそれには構わず解説を始めた。

「レクレールは全ての魔法の中でも威力が最も低いことから、ある意味有名な魔法」

そうなんだよね・・・おじさんもあたしがそれしか使えない（ってことにしておいた）ことを知ると驚いてたし。

なにせ魔法以外のスキルならかなりの量があるからね。

「でも、誰でも知っている通り、魔法もスキルと同じように強化することができる。レクレールの場合、それが最高段階まで行くと、最弱の魔法では無くなる」

「え？そうなの？」

この疑問があたしから出た物。

「知らなかったの？」

「全然。ねえ？」

「うん」

ハクアも頷く。

「・・・とりあえず、話を進めると、レクレールは最高段階まで強化するともう一つ別の属性が追加されることがあるの」

「じゃあ、さっきのは」

「うん。火の属性が追加された物。こうなるとレクレールを最弱の魔法なんて言えなくなる。他にも似た性質を持っている魔法はあるけど・・・。ママならよく分かるよね？このことの凄さが」

ライトさんの言葉に続けて言ってから、ノエルさんに問いかける。

「ああ。私も聞いたことはあったが、見たことがなかったから半信半疑だったが、さっきのを見たら、信じざるを得ない」

なにやら納得してる所に水を差すようだけど・・・。

「あたし、他の属性も使えるよ？ていうか、全部・・・」

「「「・・・・・・はい？」」」

ハーツェルン一家の声がハモり、白梟も首を傾げた。

「さっきの炎帝の他に、今使えるのは水の『泡沫（ウタカタ）』、風の『神風（カミカゼ）』、氷の『樹氷林（ジュヒョウリン）』。

今は技として使えるのはこの四つだけど、他の属性もレクレールに乗せることならできるし・・・って、どうしたの？三人とも」

三人を見てみると、何か呆然としていた。

「それに、まだレクレールのレベルも最高まで行っていないし・・・」

良いながらギルドカードに裏面にレクレールだけを表示してレベルを確認してから、レイユちゃんに

「見てみて？」

と言って渡すと、ライトさんとノエルさんも覗き込んだ。

「「「うそ（でしょ）（だろ）！？」」」

またも三人がハモった。

「レベル・・・十なんて・・・まだ半分も行っていないのに・・・」

「レベルに上限なんてあるの？」

あたしがそう言うとまた三人がハモった。

その後、夜だと言うのに、何故かハクア共々正座させられレイユちゃんにスキルのレベルについて色々お説教をされた。

なんでも全てのスキルのレベルは五十まで設定されているらしく、

それ以上上がることは無いらしい。

「これくらい常識でしょ！何簡単に破ってるんですか！」

「「はい、すいませんでした・・・」」

レイユちゃんって本当はこんな子だったんだね・・・。

でも、こっちの方が良いか・・・。

ラ・メールに着くまでは一緒にいるんだから、微妙な距離のままでは居たくなかったし・・・。

ハクアを見ると、同じことを思っていたのか、目が合って、お互い声は出さずに笑い合う。

「聞いてるんですか！」

怒られた・・・。

―性質―（後書き）

亜「戦闘描写って大変よね・・・あたしは居合いだから尚更」

作「まあね・・・。だから、この依頼が終わったら、戦闘描写は当分入れないで行こうと思ってんだ・・・」

ハ「じゃあ、どうするの？ずっと解説とかだと飽きられるよ？」

作「うん。これから考える」

亜「その所為で、ラ・メールに着くのを延ばしたりしないでしょうね？」

作「しないしない。予定通り、後二、三話で到着するよ」

亜「なら、いいわ。戻りましょ？ハクア」

ハ「うん。それじゃね？」

作「ああ。ちゃんと寝るんだぞ？」

ハ「分かってるー！」

作「亜美もあれくらい素直ならなあ・・・」

―子犬―（前書き）

フュ『一言も話せませんでしたなあ？』

ム『俺はしゃべったのにカットされた』

フュ『ええやないですか？うちなんてホンに一言も発してないんですから・・・』

ハ「どうするの？拗ねてるよ？（小声）」

亜「どうするって言われても・・・どうするのさ？（小声）」

作「だってさ、まだハーツェルン一家にはムラマサ達のこと言ってないし・・・どうすれば良いんだよ？（小声）」

亜「質問に質問で返さないでよ（小声）」

ム・フュ『聞こえてるぞ（ますえ）？』

亜・ハ・作「あ・・・」

―子犬―

「あ～・・・足しびれた・・・」

「レイユちゃんのお説教、あんなに続くなんてね・・・もうすぐ夜明けだよ・・・」

やっと解放されたのが、五分ほど前のことで・・・あたしとハクアは馬車の荷台に突っ伏した。

人間ってハイになると疲れなんか気にならなくなる物だけど、その後一気に来るからな・・・今日は敵が来ても起きないかも知れない。

まあ、レイユちゃん、お説教した後電池が切れたみたいにパッタリ眠って、今は大好きなお母さんの腕の中ですやすやと眠りについてる。

ライトさんとノエルさんの二人もさっきみたいなレイユちゃんを見たのは初めてらしくて、なんかビックリしてたな。

『まあ・・・何だ、お疲れ』

『これからはもう少し、学習した方がええんとちゃいますか？』

「フュズィは厳しいな・・・」

『そんなことありまへん』

「だよね・・・それも、優しさ、か・・・ふわぁ・・・」

あたしが言うと、直ぐにフュズィが返してきて、また返すと、眠気が襲ってきた。

足のしびれはまだ取れてないけど、眠気には勝てないな・・・。

「はは・・・確かに・・・そう、だね・・・」

ハクアも眠気が襲ってきたらしい。

『ゆっくり休めよ？しばらくは結界もあるから大丈夫だしな』

『ライトはんとノエルはんもかなりの実力者やさかい、心配ありませんからね？』

「うん・・・おやすみ・・・」

「おやすみぃ・・・」

『ああ』

『ごゆっくり』

目を瞑って、意識が落ちていく直前、腰に差していたムラマサの重みが消えた気がしたけど、結局確かめられないまま、あたしの意識は闇に落ちた。

＊

『ワン！』

『あ・・・ふふ、おいで？』

周りは白以外の色が無い空間。

そこに、小さな黒い点が一つ。

黒い小さな犬が、可愛らしく吠えてあたしに駆け寄ってきた。

しゃがんで手を差し出すと、ぺろぺろと舐めてくる。

くすぐったいよ、と言えば分かったと言うように、吠えたけど、また舐め始めた。

『君、聞いてないでしょ？』

『クゥ～ン』

小さく鳴いた子犬くん・・・ちゃん？どっちだろう？

『ちょっとごめんね？』

前脚の脇に手を入れて、持ち上げ確認する。

『うん、女の子だね』

と言うわけで、この子はとりあえず子犬ちゃんだね。

『どうして君は、あたしの夢に現れるの？』

『ワン！』

『ふふ、分からないよ』

犬の言葉を理解できたことなんて、今まで一度も無かったし、これからもきっと無いだろうけど。

まあ、いいか。

それから暫く、ごろごろしながら遊んだり、夢の中なのに寝たりして、一緒の時間を過ごした。

そして夢の中で目が覚めると、子犬ちゃんがあたしの顔を舐めていた。

『・・・今日は、おしまい？』

『クゥ～ン・・・』

『そっか。またね？』

『ワン！』

元気に一声吠えて、子犬ちゃんはこちらを振り向かず走り去っていった。

＊

「・・・・・・」

今回はハッキリ覚えてるな・・・。

ちゃんとお別れをして、覚めたのは今日が初めてだ。

『よく眠れたか？』

その問いに夢の中でも寝てた、と答えると呆れられた。

「あはは。ハクアは？」

『お前が起きる何分か前に起きて、外の様子を見てる。今は馬を休ませる為に休憩してるからな』

「そうんなんだ。今の所、問題なし？」

『ああ。途中何度か魔物が襲ってきたが、全部結界で済んだ。ライト達も感謝してたよ』

「そっか。ありがとう」

『礼を言われてるのはお前だろ？』

何を勘違いしているんだか、この子は。

「今のはムラマサに言ったの」

『？なんでだ？』

「あのねえ・・・結界で済んだのは、確かにあたしがそれを張ったからだけど、ムラマサが居ないとできない結界でしょ？これは・・・ちゃんと分かってるの？」

『ん？・・・・ああ、そういうことか。なんか、当たり前すぎて忘れてたよ』

「当たり前？」

『ああ。俺たちは魔具なんて呼ばれてるけど、結局は道具だからな・・・礼をい「はいそこまで」？』

何か馬鹿なことを言っているムラマサの言葉を中断させる。

「結局は道具、なんて巫山戯たことは二度と言わない。いいわね？」

『は・・・？』

「あんたは道具じゃなくて仲間なの。もう八年の付き合いになるのに、今更こんなことを言わせないで」

『あ・・・ああ、悪かった・・・』

「分かればよろしい。さて、あたし達も出るよ？」

『ん？何かあるのか？』

「うん。五十メートル先から群れがこっちを狙ってる。しかも二方向からだから、結界も殆ど機能しない。だから、その方向にもっと厚く張る」

返事をしたムラマサを腰に提げ、荷台から出て、ハクア達に挨拶をして、魔物に狙われてることを伝え、南西と北西部分の結界を厚くした。

それにしても、今までは二日三日のクエストを受けた時は連日魔物に狙われる、なんてことは無かったのに・・・。

荷物に何かあるのかな？

―子犬―（後書き）

ム『・・・・・・』

フュ『どうかしはりましたか？』

ム『いや・・・アミに、俺は道具じゃない、仲間だって言われてな？』

フュ『アミはんらしいな。本当は嬉しいんやないですか？そう言われて』

ム『まあ、な・・・』

―中身―（前書き）

亜「今回か、次話でラ・メールに着くんだよね？」

作「予定ではね」

ハ「大丈夫なの？まだ全然進んでないよ？」

作「うん。だから飛ばす」

亜「うわぁ」

作「何だよ、その反応？飛ばすって行ってもあれだぞ？今回の戦闘はちゃんとやるぞ？んでもって、後は移動だけにする」

ハ「魔物が来たら？」

亜「どうせ、描写せずに倒した～で終わるんでしょ？」

作「・・・・・・」

亜・ハ「図星か」

―中身―

荷物のことは気になるけど、今は魔物を一掃することがの方が先だ。ちゃんと居る方の結界を厚くしたから、普通の頭を持ってる魔物なら、別の方向から襲ってくるだろうし、そこを叩けばいい。

昨夜見たく部下を盾代わりにして突っ込んで来る奴も居るかもだけど、無傷では済まないだろう。

「ハクア、打ち上げといて？」

「りょうか～い」

ホルスターからフュズィを抜き、上空に向けて三発、魔弾を放った。

「落ちてこないな？何なんだあれは？」

「トラップですよ。ハクアが決めた範囲に敵が侵入したら、そこに向かって一直線。何メートルにしたの？」

ライトさんの質問に答え、今回はどれくらいの広さにしたのか聞いてみた。

「三十メートル」

「丁度いいかもね」

「でしょ？」

フュズィを撫でるように手を動かしながら、ウィンクをするハクア。

相変わらず可愛らしい。

「だが、三発で足りるのか？」

今度はノエルさんが魔弾を見上げながら聞いてきた。

レイユちゃんはまだ眠っている。

「大丈夫ですよ。あれ一発で十発分はありますから。あ、そういえば数は？」

「ざっと五十」

「「ごっ！」」

一瞬声を上げそうになったライトさんとノエルさんだったけど、レイユちゃんを起こさないように何とか堪えた。

さっきの発砲音でも起きなかったんだから、多分大丈夫だとは思うけど・・・。

「五十か・・・問題ないね」

「うん。二発で一体仕留められれば、後は界で十分でしょ。あ、そうだ・・・ライトさん」

「・・・え？あ、なんだ？」

少し遅れて反応したライトさんにあたしは依頼人から、荷物について何か聞いていないかを聞いた。

「なにか、ってのは？」

「あたし達、今まで長期のクエストを受けたことは無いんだけど、一週間位掛かるクエストは何個もあったんです。でも、その時も、休んでいる所を二日連続で襲撃を受けたことはありませんでした」

「それなのに、昨日夜に襲撃を受けたにも関わらず、今もこうして狙われています。確かにニュアージュから離れては居ますが、この近辺の魔物の強さは、ニュアージュ周辺の魔物と大差ありません。気を付けなければならないのは、黒獣と白獣、この二体くらいです」

「昨日の魔物は実際、ニュアージュ周辺の魔物と大して変わりません。昨日の所からも、そんなに離れてませんよね？」

あたしの問いに、ライトさんが頷き、あたしが言いたいことが分かったのか、言葉を続けた。

「昨日のことを知っている魔物は多い。ならば、何故尚も狙い続けるのか？と言うことだろう？」

あたしとハクアは頷いた。

かなり遠回しに言ったけど、結局聞きたかったのはそこ。

魔物にだって人間達と同じように情報網が存在する。
昨日の戦いを見ていた魔物はいくらでも居るだろうし、なにかの群れの一員なら、伝えている筈だ。
今こちらを狙っている魔物の中にも、数は分からないけど間違いなく居るだろう。
それなら、あたし達が自分たちより強いってことは分かってる。
にも関わらず、狙っている。
「昨日は数が少なかったから分かりませんでしたけど、今狙っている奴の大半は荷物の方を狙っています。一体、何があるんですか？あの荷物に」
箱や袋に入っているから、中身は分からないし、特別な力を発している訳でもない。
単に感じ取れないだけなのか、何の力もないのか・・・。
「俺たちも一部しか聞いていないが、あの荷物の中には何か生物が入っている」
「生物？」
「ああ。アミが気づかなかったのは、荷物全てに気配遮断が掛けられているからなんだ。ただ、術者が未熟な所為なのか、魔物には効果が無いときた」

「・・・そこはどうでもいいです。その生物がなんなのかは・・・」

「教えてもらえなかった」

首を振りながら、ライトさんはそう言った。

「ホー！」

「来るぞ！」

白梟が鳴き、敵の接近を告げた。

約二秒後、敵が攻撃範囲に入り、魔弾が魔物居る方へ向かっていった。

遠くで何度か聞こえる魔物の声。

「ライトさん、馬車を下げてください。やはり待つのは面倒なので、一気に行きます。ハクアは後ろをお願い」

「了解」

後ろは任せ、馬車が下がったのを確認してムラマサを水平に構え、

「居合い術一式・二ノ型――――一文字（イチモンジ）」

ヒュン！

全身の力を一瞬抜いて振り抜き、鞘に戻す。

敵の姿は見えていなかったけど、問題なし。

まあ、

ズシン！ズシン、ズシン！

直線上にある木もお構いなく斬り倒すんだけど・・・。

今更だけどあたしが使う、居合い術一式は炎帝以外は全て無属性の攻撃。

黒獣と戦った時に使った陽炎も、レクレールを使ってはいるけど無属性。

未開紅はレクレールも使わない、純粋な無属性の攻撃。

今使った一文字も同じく、無属性の攻撃でただ水平に振り抜いただけ。

だから一文字。

「終わったよ」

「うん。こっちも終わった」

「音しなかったけど？」

発砲音なんて一度も聞こえなかったのに。

「わたしだって日々成長しているんだよ」

そう言って小振りな胸を張るハクア。

人のこと言えないけど、なんか・・・頑張れって思ってしまった。

＊

魔物が退いたのを確認した後、あたしはライトさんに手伝ってもらい、全て荷台から降ろして気配遮断を斬った。

そうすると確かに、荷物の中から人の気配を感じた。

「ここまで起きていないのは、眠らせられているからですか？」

「分からない。俺たちは本当に生物であるということしか聞いていないんだ」

「そこを疑っている訳ではありませんよ。ここまでの騒ぎで目が覚めていないのか、それが疑問なんです。まあ、この際レイユちゃんは例外として・・・」

レイユちゃんはさっきの戦闘の際もずっとノエルさんの腕の中で眠っていたけど、この中に居る人もそうだとは限らない。

もし起きていたとしても、声を出していないのは単に怖いからなのか、言葉を話すことができないからなのかは分からないけど・・・。

「はは・・・」

「とりあえず、開けますよ？」

「は？いや、いいのか？そんなことして」

「あたし達が受けた依頼は荷物の護衛であって、人身売買じゃありませんから」

ライトさんの言葉には構わず、あたしは木箱の蓋を開けた。

すると

ぴょこ

と、なんとも可愛らしい音を立てて猫耳が姿を現した。

『・・・・・・・・・』

あたし含め、全く予期していなかった出来事になんと言えば良いのか分からず、暫くこの場にはレイユちゃんの規則正しい寝息が響いていた。

＊

「えっと・・・助けてくれてありがとう。ボク・・・あ、名前ないんだった」

降ろした荷物をまた全て戻して、猫耳に尻尾、茶髪のショートでふわふわした髪型をしていて、目は黒く、あたしよりも小さな（ここ大事！）女の子と一緒に荷台に乗ると、女の子が唐突にお礼を言って名乗ろうとした。

でも、名前が無いということを思い出して途中でそれは終わった。

「とりあえず、自己紹介するね？あたしは、アミ・タカマチ」

「わたしはハクア」

そこに疑問は感じたけど、それよりも先に、名乗ることにした。

まあ、それとは全く関係ないことなんだけど、ライトさん？

もう少しバレないようにこっちを気にした方がいいと思う。

バレバレだよ・・・。

「アミ、ハクア」

女の子はあたし達の名前を復唱した。

「その子とその子は？」

そういって指されたのは、他でもないムラマサとフュズィだった。

「名前、あるんでしょ？良かったら教えて？」

「分かるの？ムラマサ達のこと」

「ムラマサって言うんだね？その子は？」

ハクアの膝にいるフュズィをさして、女の子がもう一度聞いた。

「ル・フュズィだよ。愛称はフュズィ」

「ムラマサにフュズィ・・・アミに、ハクア」

また、あたし達の名前を復唱する女の子。

「ねえ、あなたはどうして名前がないの？」

直球だけど、特に言い回す必要性を感じなかったらそう聞くと、予想どおり女の子は直ぐに答えた。

「えっとね・・・キオクソウシツっていうやつ」

と・・・。

―中身―（後書き）

ム『予告なしで新キャラが出てきたぞ？』

フュ『しかも記憶喪失なんて・・・ベタやな・・・。どうせ、名前も決まってないんと違いますか？』

ハ「ううん、ちゃんとあるみたいだよ？」

亜「珍しいわよね・・・、あんたが予め決めておくなんてさ」

作「お前らの俺に対する評価ってどうなってんの？」

亜・ハ・ム・フュ「『無計画』」

作「・・・・・・・」

亜「図星か・・・あ、前書きと終わり方一緒だ。まあ、いいか。それではまた次話でお会いしましょう！」

ハ「ばいば～い」

―平等―（前書き）

ム『後三週間は掛かるってのに・・・本当に今回でラ・メールに到着するのか？』

作「大丈夫だって。それより、亜美達は居ないんだから武器のままじゃなくても良いと思うけど？」

ム『いつ戻ってくるか分からないだろ？』

作「そんなにす「ただいま～」・・・すまん」

ム『いや・・・』

亜「ん？どうかしたの？」

作・ム「『いや、なんでも・・・』」

―平等―

あれから約三週間、あたし達はラ・メールに到着した。

建物の外観はニュアージュと似ていて、石で造られている。

「俺たちは、到着したことをここのギルドに伝えてくる。アミ達は、先に言い訳を考えておいてくれ」

そういって、ライトさんとノエルさんの二人は馬車でギルドに向かった。

レイユちゃんはラーニャと仲良くなって、今も手を繋いでいる。

で、ライトさんが言っていた言い訳と言うのは、他でもないラーニャのこと。

他の荷物はどうでもいいんだけど、この子を依頼人である貴族に渡す、しないことにあたし達は全員一致で決めたから、その訳を考えておいてくれと言うこと。

考えるまでも無く決めているけどね。

ちなみにラーニャと言う名前はあたしが付けました。

名前も思い出せない訳だからなんて呼べばいいかも分からなくて聞いた所

『アミに決めて欲しい！』

と、何故か瞳をきらきらさせて言われ、その目がとても輝いていたので断ることができずに・・・。

だってさ・・・・・それに加えて尻尾まで凄い振ってるんだよ？

耳まであたしの言葉を一言一句逃さんと言わんばかりにピンと立ってたし・・・どう断れって言うんですか・・・。

まあ、嫌って訳じゃないけど。

で、ハクアの時見たく、改めてラーニャを見た時にパッと浮かんだのが、『ラーニャ』。

『ラーニャ』

呟くと、ラーニャはあたし達の時と同じように、今度はその名前を復唱した。

気に入ったのか、何度もその名前を復唱していたから、あたしが呼んでみると

『・・・えへへ』

と少し恥ずかしそうに、けれど嬉しそうにラーニャは笑った。

「レイユ、あの雲おもしろい形してるよ？」

「え？どれ？」

「あれ。ほら、あの大きな雲の横にあるでしょ？」

「・・・あ、ホントだ。おもしろい～」

空を指さしたラーニャにつられてあたしとハクアも空を見上げた。

するとそこには確かにおもしろい形の雲があった。

それを見て、またラーニャ達に視線を戻す。

二人は傍から見たら姉妹にしか見えないほど仲が良い。

それは本当に良いことだけど、周りのラーニャを見る視線が気にいらない。

ラーニャ本人がそれを気にしていないんだから、あたしが怒ってもしょうがないけど腹が立つ。

ここが異世界だからと言ってもやっぱり人間は人間ってことか・・・自分と違う人には奇異の視線を遠慮無くぶつけそれが相手をどれだけ傷つけているのか気付こうともしない。

傷ついていないと、無意識のうちに都合良く解釈している。

ああ！むかつく。

「アミ・・・どうにもならないよ、これは」

「分かってる。分かってるけど・・・むかつく」

これはあたしの力どころか、どれだけの力を集めても、どれだけの時間を掛けても解決できない問題。

平等、なんていう言葉は少なくとも人間には当て嵌まらない言葉だ。

女も男も、結局その違いだけで分けられる。

ガキの癖に調子に乗るな。

男の癖にこんなこともできないのか。

これまでの十年で幾度となく聞いてきた言葉だ。

あたし達に向けられた言葉も、あたし達以外の人に向けられた言葉も何度も聞いてきた。

あたしだけに向けられていた言葉なら、何も気にすることは無かった。

でも、ハクアに向けられた言葉や、今の様にラーニャに向けられて

いる奇異の視線。

どうにもできないことが分かっていても、我慢ができなくなる。

何も違う所なんて無いのに・・・・。

同じなのに・・・。

どうしてそれが分からないんだろう？

「きゃっ！」

「っ！」

ラーニャの悲鳴が聞こえて、見ると

「おい、これ本物だぜ！」

「マジ！？オレにも触らせろよ！」

二人の男が嫌がるラーニャの尻尾を掴んでいた。

ドクン

「アミっ！」

そこからは、あたし自身何をしたのか覚えていない。

＊

「ん・・・ここ、は？」

『起きたか』

目を覚ますと、ムラマサの声が聞こえて、見てみると壁に立て掛けられていた。

そのまま周りも見ると見慣れない部屋で、聞くよりも先にムラマサが説明してくれた。

『お前、あの二人に殴りかかったんだ。幸い、と言っていいか分からねえが、戻ってきたライトがお前を気絶させなかったら正直危なかったよ・・・』

「・・・・・・ごめん」

『謝る必要はねえよ。俺たちだってむかついてた。何も違う所なんてないってのに、無遠慮に奇異の視線をぶつけるあいつらにはな・・・。だが、お前が殴りかかるのは予想外だった。ハクアとフュズィは勿論、ライトたちも驚いてたぞ？』

何かあったのか？

ムラマサは最後にそう聞いてきた。

そういう訳じゃない。

確かに向こうに居た頃も、あたしは周りからなにか異質な物を見るような目で見られていたことはあった。

単に女の子が好きだというだけで・・・。

でもそれはどうでも良かった。

旭と雫がずっと一緒に居てくれたから。

「そういう訳じゃないよ。ただ、気持ちが抑えられなくなったの・・・ムラマサと・・・同じこと考えてたら」

『そうか。ま、お前が怪我なんかしなくて良かったよ。それから、ありがとな？』

「え？」

何故かお礼を言われてあたしが声を上げると、ムラマサは言った。

『お前、確かに怒ってたんだろうけどさ・・・その怒りにまかせて俺を使うことはしなかったからな。あの場面だったら、多分殆ど奴が武器を使ってたと思うぜ？』

「そんなの・・・当たり前だよ。ムラマサを人殺しにはしたくない」
確かにムラマサは武器で、やっぱり道具で・・・だけど、それ以上に、仲間だから。
『はは』
笑った後、ムラマサまたありがとうな、とお礼を言ってきた。
「あ、ハクア達は？」
聞いたのとほぼ同時に、部屋のドアがノックされた。
「あ、はい」
『アミ？目、覚めた？』
ラーニャの声だった。
扉を少しだけ開いて、様子を窺ってくるラーニャになんと声を掛けたら良いのか分からず、あたし達は暫く黙っていた。
『早く入れよ？言いたいこと、あるんだろ？』
でも、ムラマサのその一声で、ラーニャは入ってきた。
そして、ベッドのあたしの近くに腰掛ける。
「・・・怖かった？あたし」

ラーニャは少しの間を置いて、首を縦に揺らした。

「でも、あの男の人達の方がもっと怖かった・・・」

「ごめん。もっと注意しておかなきゃいけなかったのに」

今度は首を横に振る。

「見た時は確かに怖かったけど、ボクの為だって知って・・・嬉しかった。多分、ボクの為に怒ってくれた人なんて、居なかったから」

「何か思い出したの？」

「違うよ。本当に何となく、そうじゃないかなって・・・て、こんな話しに来たんじゃないよ！」

ラーニャは突然立ち上がって、あたしを正面から見据え、

「助けてくれて、ありがとう・・・本当に嬉しかった」

笑顔で、お礼を言ってくれた。

＊

あの後、下に降りるとまずはノエルさんに怒られ、でもよくやったと褒められた。

ライトさんからは、気絶させて済まなかったと謝られ、その後やっぱりよくやったと褒められた。

レイユちゃんには怖がられてしまったけど、もう少し大きくなった時には理解してもらいたいと思う。

ハクアには怖かったと泣き疲れて、小さな声でフュズィに怒られた。

でも、やっぱりそこには優しさがあって、心が温かくなる。

「ごめんね？みんな。あ、依頼の方はどうなったの？」

「ああ、そっちは問題ない。今から依頼人に荷物を届けることになってる」

その場所を聞き、そこにはあたし達で向かうことにして、制止の声を掛けてくるライトさん達の声を無視して、あたし達は依頼人の所に向かった。

燃やすと周りに迷惑だから、凍らせてあげる。

待っててね？依頼人さん。

―平等―（後書き）

ラ「え？えっと・・・ここ、どこ？」

作「よっす！」

ラ「きゃっ！」

作「あ、そんなに驚かなくても俺はぶへらあっ！」

亜「ラーニャに近づくな。菌が移る」

作「てめっ！いきなり陽炎なんか撃ってくんなよ！下手したら死ぬぞ！」

ム『お前はこれくらいじゃ死なないだろ』

作「いやいや！俺も人間だからな！」

亜「黙りなさいよ。ラーニャが怖がってるでしょ？ていうか喋るな息をするな空気が汚れる」

ハ「アミ・・・そんなに言うと・・・」

フュ『もう手遅れどす』

作「・・・・・・・・」

ム『見事にやられてんな・・・』

―感謝―（前書き）

亜「ねえ、依頼人の所の落ちはもう殆どの人が気付いてると思うんだけど？」

ハ「だよね。凍らせる、って言ってたし・・・」

作「だから、凍らせるのはパッとやってすぐ宿に戻る。本当にパッと凍らせるから。後は、いい加減他の契約者を探しに行こうかな・・・と。お前も会ってみたいだろ？」

亜「うん。三人はもちろん、もう一体の契約していないドラゴン、気になるから」

ハ「そしたら、ライトさんたちとはお別れだね。おじさんたちにも挨拶しないと」

亜「うん。十年もお世話になったし、何より秘密を知ってる数少ない人たちだもんね」

作「飛んで行けば一瞬だからな」

亜「あ、そっか・・・あたしたち飛べたんだ」

ハ「徒歩が殆どだったから忘れてた・・・」

作「はっは～」

―感謝―

「居合い術二式・一ノ型――――樹氷林（ジュヒョウリン）」

依頼人の家に行き、中に迎えられお茶を準備している間に家を凍らせて退散する。

名前の通り、この技は氷を樹の様に至るところから発生させる。

居合いで氷り属性のレクレールをばらまき、剣を納めればそれが合図となって一気に氷の樹がその芽を出して植えに敵がいれば串刺しになるし、それができなくても足止めとしても機能する。

結構使い勝手が良い技だ。

荷物も全部氷っているか、壊れているかしているだろうけど知ったこっちゃない。

ここに来る前に依頼人の評判を聞いたけど、良い話なんてひとつも出なかったからね。

問題ないでしょ。

「周りの人結構驚いてるね」

「そうだね・・・別にいいんじゃない？関係ないし」

その後宿に戻り、事の旨をライトさんたちに伝えた。

「早かったな？」

「はい。さっさと凍らせてきたので。結構綺麗にできたんで、後で暇があったら見てみてください」

「はは。分かったよ」

その後、ライトさんから報酬を貰ったけど、あたしが本当に貰っても良いのか疑問だった。

今回の依頼で、あたしは何もできていないのに。

そう思って返そうとしても、ライトさんたちはそれを受け付けなかった。

＊

「じゃあな？元気でやれよ？」

「またいつかな？」

「ホー」

「ばいばい、ラーニャ」

手を振るレイユちゃんにラーニャも手を振って答える。

あたしとハクアも手を振る。

ラーニャは本人の希望であたしたちと一緒にいることになった。
レイユちゃんがしょんぼりしていたけど、二度と会えないって訳じゃない。
ラーニャもレイユちゃんも、まだまだ生きるんだから。
「ばいば～い、レイユちゃ～ん」
お別れを済ませた後、あたしたちはラーニャの服を買うことにして今は服飾店にいる。
「ラーニャ、どんな服がいいの？」
ハクアが聞いた。
「アミたちと同じのがいい」
「同じって、着物？」
「うん。あ、あんな感じの！」
着物なんて店で売っているのを見た事がないから、見つからないだろうと思っていた矢先にラーニャが店の一角を指さした。
そこには確かに着物が一着だけあった。
オレンジの布地で模様はないけど、落ち着いた印象を受ける。

確かにラーニャには似合うかも。

「それじゃ、あれにする？」

「うん！」

ラーニャは元気に頷いた。

三人で着物に近づいて行くと、何か力を感じた。

「ハクア」

「うん。魔具だね」

「ラーニャ、分かってた？この子が魔具だってこと」

ラーニャは首を傾げた。

ムラマサたちには気付いたのに、どうしてだろう？

・・・・・あ、そういえばムラマサたちには気付いたけど、着物には気付いてなかったか。

何か基準でもあるのかな？

ムラマサとこの子の違いは喋らないってことだけなんだけど、それかな？

「まあ、いいか。この子がいいんだよね？」

「うん」

「えっと・・・あれ？この子、銅貨一枚だよ？」

値段を見たハクアがおかしい、といっているようにそう言った。

確かに可笑しいけど、単に見る目がなかっただけだろうし、気にすることはない。

「値段なんてどうでも良いって。高ければ良いってもんじゃないし、たとえやすくても自分が気に入った物なら長く使おうと思うんだしさ。あたしたちだって、この子たちとはもう十年一緒なんだし」

「それもそうだね」

「ラーニャ、試着してみたら？」

「うん。ちょっと待っててね？」

着物を持って試着室に入ったラーニャに誰も近づかないように前で待っていたけど、十分くらい経ってもラーニャは出てこなかった。

なんか、苦戦している様な声は聞こえるけど・・・あれかな？

着付けに苦戦しているのかな？

それから更に三十分程まって、やっとラーニャが出てきたけど、やはり上手く着ることができなかった様で崩れていた。

またその崩れ方がね・・・右肩が盛大に垂れていて、白い肌が露わ

になっていたり、左足が殆ど露出されていたりと・・・無駄に色気があった。

「うぅ～・・・アミぃ～・・・」

で、そのまま半泣きであたしに抱きついてきた。

可愛いな。

「あ～、泣かないの。ほら、直してあげるから、まっすぐ立って？」

「はは、初めてだと苦戦するよね」

「あたしたちはすぐにできたけどね」

喋りながら整えて、帯を締めると少し苦しそうに呻き声を上げたけど、これは我慢して貰わないと。

尻尾はどうしようかな？

穴を開ける訳にもいかないし・・・いや、あたしたちが言えることでもないんだけど。

「ラーニャ、尻尾はどうする？」

「う～ん、穴開けたいけど、そうするとこの子が痛いだろうから・・・このままでいいや。慣れるまで歩く時ふらつくかもだから、支えてくれる？」

「分かった」

「服はその子で決まったけど、武器とかはどうする？戦えないなら、わたしたちで守りながら戦うから問題ないけど」

「う～ん・・・今はいいんじゃない？帰りは飛んでいくから戦闘もないし」

「あ、そっか」

それから店員さんを呼んで、その場で銅貨一枚を渡して店を出た。

街を出て、少し歩いたところでラーニャと着物の契約が終わるのを待つ。

契約が終わって、これから飛んで行くと言うことで、ラーニャをお姫様抱っこして翼を出すと、かなり驚いていた。

ハクアも既に翼を出していて準備はできている。

「しっかり掴まっててよ？」

「う、うん」

まだ少し戸惑っているラーニャをしっかり抱えて、最初にあたしが飛び立ち、後からハクアも飛んできた。

ニュアージュに向かって飛行しながら、ラーニャにあたしたちのこ

とを伝える。

「あたしはね、ムラマサとこの着物、二人の魔具と契約しているんだけど、もう一人、ハクアと契約してるの。ラーニャはドラゴンと契約した人のこと、知ってる？」

「え？うん・・・今までで三人しかいないってことだけなら」

やっぱり一般に伝わっているのはそれくらいなのか。

「わたしは、そのドラゴンなんだよ？」

少し後を飛んでいたハクアが隣に並んで飛行しながらそう言った。

「・・・・・・・・・・・・え？」

長い間をおいてラーニャの口から出たのは、その一言だった。

＊

全部ラーニャに説明した後、ニュアージュに到着して、女将さんに挨拶とラーニャの紹介をして、そのまま街をでることを伝えると、女将さんは

「・・・・そうかい・・・・寂しくなるね」

と確かに寂しそうだけど、笑いながらそう言ってくれた。

「でも、また来ますから」

「もちろんだよ。さよならしてもう来ない、なんて許さないからね？」

「はい。それじゃ、荷物纏めてきますね？」

でも、部屋に戻ろうとしたあたし達を女将さんが止めた。

「何となく予感はしてたんだ。もう纏めてあるよ」

そう言って、あたしの鞄をカウンターにおいた女将さん。

「あんた、この服と鞄、ずっと持ってたよね？中に入ってる、この世界じゃない文字がたくさん並んでいる書物とか、見たことないけーたい、とかいうのも」

鞄をあたしに差し出しながら、女将さんは懐かしむように言った。

鞄を開けて、筆箱を取り出しピンクのシャーペンを一本出して、女将さんに渡した。

「それ、差し上げます。なくさないでくださいね？」

「・・・・・・ああ。もちろんだよ。何があっても手放さない」

「はい。それでは、十年間お世話になりました」

「わたし達の秘密も、守ってくれてありがとうございました」

あたしとハクアがお辞儀をしたのを見て、自分もしなければ、と思ったのかラーニャも何となくと言った感じで頭を下げた。

「そんなの当たり前だよ。ほら、ギルドの二人にも挨拶しなきゃだろ？早く行きな？」

「「はい」」

「あんた達が私の何倍も生きてるなんて、未だに信じられないよ」

女将さんは最後にそういって、優しく微笑んだ。

次にギルドに向かって、おじさんとお姉さんにも同じ事を伝える。

「そうか。まあ、元気でやれよ？ほら、おめえも泣くんじゃねえ」

「うっ・・・ですが・・・ぐす・・・」

「たく」

「本当にお世話になりました。これ、受け取ってくれますか？」

「これは・・・？」

差し出したのは、赤と青の二本のシャーペン。

「あたしの世界で、文字を書くのに使っていた物です」

「そうか。分かった、受け取らせてもらうとするよ」
最初におじさんが青いシャーペンを受け取ってくれた。
「お姉さんも・・・受け取ってくれますか？」
「う・・・もちろん・・・よ・・・あり、がとう・・・うぅ」
涙を遠慮なしに流しながら、お姉さんは赤いシャーペンを受け取ってくれた。
「また、必ず来ますから、その時はよろしくお願いします」
「ああ。どっかでくたばりでもしたら、許さねえからな？」
「分かってますよ。おじさんこそ、そろそろ年なんだから無茶はしないでくださいよ？」
「ハッ！まだまだガキに心配される程、落ちぶれちゃいねえよ」
「・・・ホンとは・・・嬉しいくせに・・・ぐす」
「うっせえ」
お姉さんの言葉に、おじさんはその一言だけを返した。
「それと、ありがとうございました。秘密を守ってくれて」
「んなのは当たり前だ。礼を言われるまでもねえ」

「アミちゃん、ハクアちゃん、それにラーニャちゃんも。いつでも歓迎するからね？」

「はい」

「お土産とか、色々持ってきますね？」

「えっと・・・ありがとうございます」

「それでは、行きますね？本当にありがとうございました」

「ああ」

「うぅ・・・元気でね！」

おじさんと未だ涙を流しているお姉さんに見送られて、あたしたちはギルドを出た。

＊

『それで、次はどこに行くんだ？』

『契約者を捜すと言うても、当てがありませんからね』

「いいのいいの。適当にぶらぶら～と旅をしていれば、その内見つかるって」

「そうそう。見つけようと思って見つけられる所にいるなら、とっくに見つかってるからね」

「ドラゴンって、怖くないのかな？」

「怖くないよ。ハクアは怖くないでしょ？」

「うん」

「他のみんなも、契約していない一体を除けば、人の姿をしてるから大丈夫だよ」

そんな会話をしながら、

『やっぱ、八年もいた街を出るとなると、名残惜しいもんがあるな・・・』

『不思議なもんなやなあ・・・。うちらは、もっともっと永い時を生きとるゆうのに』

『アミたちと出会ってからだよな？一日一日が楽しくなったのは』

『そやな。それまでは、ひたすらあの場所で誰かが来るのを待っとって・・・はっきりゆうて、あんな所に来るんは、変な人たちやと思っとったけど。意外とまともでびっくりしたわ』

ムラマサとフュズィの会話を聞きながら、あたしたちは街道をゆっくりと歩き当てのない旅を続ける。

今度はどんな出会いがあるのかな？

青い空を眺めながら、あたしは期待に胸躍らせていた。

―感謝―（後書き）

亜「それで？次はどこに向かうの？」

ム『どうせ決めてないだろ？』

作「もちろんだとも」

亜「威張るな」

ハ「まあまあ。ラーニャの故郷に行ったりはしないの？」

作「ラーニャ本人がそれを望むなら、探すけどさ・・・」

フュ『ラーニャはんはどう思てはるんですか？』

ラ「・・・分からない・・・でも、アミたちがいるなら、それでいい」

作「だってさ」

亜「そっか・・・。なら、気ままに旅を続けようか？」

ラ「うん」

ハ「よろしくね？」

ム『まあ、楽しくなるさ』

フュ『ええ。賑やかなんは嫌いやありません』

作「だな」

―一年―（前書き）

亜「今回から新章突入？」

作「新章って言うよりは、何だろう。幕間っていうか、そんな感じ」

ハ「二．五章・・・みたいな？」

作「そうそう。でも、どれ位の長さになるか分かんなくてさ」

亜「いいなじゃない。やるだけやってみれば？」

ハ「そうそう。そんな考えてやるのは、似合ってないって」

作「はっはー、言ってくれるな。まあ、いいか・・・じゃ、やるよ。『高町亜美の物語・二．五章』。開幕だ」

―一年―

ニュアージュを出て約三ヶ月後に緑豊かな街、プレールに到着して、そのまま滞在して、気が付けば一年が経っていた。

本当に早いな、時間が経つのは・・・。

「アミ、着物、おかしな所ない？」

「えっと～・・・・・・うん、大丈夫。もう一人でも大丈夫だね」

ラーニャは、寝る時は尻尾が窮屈だからと言うことで着物を脱いで寝ているから、毎朝着付けないといけない。

何度か穴を開けようと思ったみたいだけど、その度に

『この子が痛がるから、やっぱり我慢する』

と言って、そのままにしている。

優しい娘だな、と思う。

やっぱり最初の頃は、あたしかハクアが手伝っていたんだけど、少しずつ慣れていって、今日はどこもおかしな所はなかった。

「ホント？」

「うん。ハクアも見てみて？」

髪を整えているハクアに呼びかけ、見て貰う。

「・・・うん、できてるよ。よくできたね？ラーニャ」

「えへへ」

ハクアに頭を撫でられて、嬉しそうに頬を緩ませるラーニャ。

この一年で身長が追い越された。

あたしもハクアも伸びはしたけど、ラーニャの成長速度の方が早くて半年くらいで抜かれちゃったよ。

その結果、このパーティ内で一番小さいのはあたしと相成りました。

使い方合ってるのかな？

いいか、別に。

身長は、ハクアが百六十三？。

ラーニャが百六十二？。

あたしは百五十九？。

一？しか伸びなかった・・・。

これが娘に身長を超された親の気分ってやつなのだろうか？

嬉しい様な、寂しい様な・・・。

『そういや、アミ。お前最近夢は見るのか？』

「え？いきなりなに？」

『アミはん、以前何日か飛び起きたことがあったやろ？最近はそれがないみたいやから、気にしとらんかったけど、大丈夫ですか？』

「ああ、そのことね。大丈夫、最近・・・じゃないか。ライトさん達と一緒に依頼を受けたことあったでよ？」

「レイユちゃん、元気にしてるかな？」

「ライトさんとノエルさんがいるんだから、心配ないよ。それで、それがどうしたの？」

脱線しかけたのをハクアが見事に直してくれた。

「うん。お説教受けたことあったでしょ？その日に見た夢からなんだけど、覚める時はちゃんとまたね、って挨拶をしてからお別れしてるから、飛び起きることは無くなったの」

『そうなのか。まあ、あの時は俺たちも心配してたからな・・・良かったよ』

「ありがとね。もう大丈夫だから。それで、今日はどうする？」

まだ予定を何も決めてない。

「ボクはちょっと特訓したいかな？一番どの属性が合ってるのか、早く見つけたいから」

ラーニャは、ここプレールに来てギルドに登録した。

その際スキルを確認したところ、魔法が多くあったんだけど、どうも全部が等しい威力を持っているって訳じゃなくてまちまちで、日によっても違うからどれが一番合っているのか未だに分からない。

「今までの中で、一番威力が高かったのは水の魔法だったから、多分それが一番向いているのかも知れないけど、他にも色々試してみたいから」

「張り切るのは良いけど、周りには十分気を付けないとだめだからね？」

「うん。それじゃ、早速始めてくるね！」

「気を付けてよ？」

「分かってる～！」

部屋の窓から飛び出して裏庭に飛び降りた。

ここ三階なんだけどな・・・。

流石は猫っ娘。

そしてすぐに聞こえる爆発音とラーニャの、

うにゃー！

と言う声。

今日も賑やかだね。

「ハクアは？」

「フュズィとデート」

「そっか。楽しんできてね？」

「もっちろん！」

元気にサムズアップするハクア。

着物にも関わらず元気に走って部屋を出て行き、こちらもまたすぐに聞こえてくる挨拶の声。

すっかり人気者になってるんだよね、ハクア。

確かにね・・・ハクアもラーニャも可愛いんだよね。

夜寝てる時に、二人とも毎晩くっついてきて、なんか娘みたいで頬笑ましい。

偶に変な所まさぐってくるけど、そこもやっぱり可愛い。

『さて、俺たちはどうする？』

「う～ん・・・特にすることも無いから、型の確認でもしようか？」

『おう。どれから行く？』

「一式を最初から。まずは陽炎ね」

『了解。あ、その前に風呂の準備しておいたらどうだ？汗かくだろ？』

「あ、そっか。分かった」

お風呂の準備をして、確認を始め、最初は一式だけを通そうと思っていたけど、楽しくなって来て、二式まで通してしまい、気が付くとそろそろお昼になる時間だった。

『お疲れ。風呂入ってさっぱりしてこいよ』

「うん。ラーニャが戻ってきたら、言っておいてね？」

『ああ。寝ないように気を付けろよ？』

「は～い。ムラマサもゆっくりしててね？」

『ああ』

ベッドにムラマサを寝かせて、お風呂に向かい、着物を脱いでたた

み、黒獣の牙は首から提げたままにして、浴場に続く扉を開ける。
中に入り、お湯に手を入れて湯加減を確かめると、丁度いい温度になっていた。
桶にお湯をためて、頭から被り、体と頭を洗って、浴槽に浸かり、ホッと一息つく。
「はぁ～・・・気持ちいい～。ムラマサとフュズィも入れたらいいのに・・・」
汗をかいたりはしないけど、自我を持っているんだから疲れだってしっかり感じてるだろうし・・・どうにかして疲れを取る方法はないかな？
「・・・・・・あ、今寝そうだった。危ない危ない」
ムラマサに言われたばっかりだったのに。
と、起きていようと頑張ったけど、結局睡魔には勝てずあたしは眠ってしまった。

―一年―（後書き）

ム『いつものことだが、今回はかなり短いな？』

フュ『次話からはもう少し、長くするみたいです』

ハ「そうなの？」

作「ああ」

ラ「ねえ、アミは？」

作「ああ、そのことだけど、この章の最後の話までは前書きにもここにも来ないから」

ム『そうなのか？じゃあ、結構長く会えないってことになるな・・・』

作「でも、本編ではずっと近くにいるからさ」

ム『・・・それもそうだな』

フュ『そない、寂しがらんでも』

ム『ばっ！んなことねえよ！』

作「ごめんな？少しの間我慢してくれ」

ム『だから！寂しくなんかねえって！』

ラ「アミのこと、大好きだもんね？ムラマサ」

ム『ぐ・・・』

作「はは。これからも頼むな？」

ム『・・・当然だ。アミは俺が護る』

作「ああ」

―過去―（前書き）

作「昨日は結構長くなるかもって言ったけど、もしかしたらすぐに終わるかも」

ハ「あれ？そうなの？」

作「ああ。多分後、二～三話位。良かったな！ムラマサ！結構早くアミに会えるぞ！」

ム『本当か！？』

作「おうともさ。少しの我慢だ」

ム『ああ！』

ラ「嬉しそう」

フュ『ムラマサはんは、ほんまにアミはんのこと大好きやからな』

―過去―

いつの間にか眠っていたのか、閉じていた目を開けるとそこは白以外何の色も無い空間だった。

そして、少し遠くには小さな黒い点があり、少しずつこちらに近づいてきている。

見えてきたのは、すっかり見慣れた黒い毛に覆われた小さな体と蒼く光る綺麗な瞳。

小さな尻尾をぱたぱたと振って喜びを表現している、この空間に現れる唯一の存在である子犬ちゃん。

『ワン！』

元気に吠えて、勢いそのままに飛びついてくる子犬ちゃんをしっかりと抱きとめて、頭を撫でる。

『君は相変わらず元気だね』

言いながら、今日は何をしようかと話しかけると、しばらく悩んだように唸り、やがて腕から飛び降りると地面、と言っていいのか分からないけど、そこに寝ころぶ子犬ちゃん。

どうやら寝るみたいだ。

あたしも隣に寝ころんで、子犬ちゃんをそっと抱く。

前にもあったけど、夢の中で寝るというのは可笑しくて少し笑えてしまう。

なんてことを考えながら子犬ちゃんを見ると早くもうとうとしていて、とても眠そうだった。

『お休み』

『クゥ～ン・・・』

小さく鳴いて、その後すぐに聞こえてきた寝息。

やっぱり子どもだからなのかな？

寝る子は育つって言うから、たくさん寝るんだよ？

だからって寝てばかりじゃ駄目だけど。

あたしも目を閉じて、子犬ちゃんの規則正しい寝息を聞いている内に意識は闇に落ちた。

＊

夢を見ている。

夢の中で夢を見るっていうのは、初めてのことだけど、こんなにはっきり夢だって分かるのも初めてだな。

子犬ちゃんが出てくる夢もはっきり分かるけど、ここまでじゃない。

この夢では、あたしは第三者の立場の様で、上空から地上を見下ろしていた。

そこは雲も突き抜ける大きな山で、頂上には全長十メートルはあろうかと言う鳥が立っている。

金色の羽毛に包まれ、頭の毛は後方に流れるように生えていて風に靡く。

瞳はルビーの様に深紅に染まっていて、圧倒的な力を感じる。

どうして山頂に立っているのかは分からないけど、多分一番落ち着くところ何だろう。

麓には湖があり、周りは大きな木に囲まれている。

この山全体に、結構な数の魔物が棲んでいるのか、辺りからは鳴き声や木が倒れる音なんかが聞こえている。

鳥を見てみると、じっと下を見ていて、あたしもまた下に視線を戻す。

すると、湖を囲んでいた森から二体の魔物が出てきて水を飲み始めた。

その二体の魔物の名は『黒獣』。

一体は五メートル程の大きさ、もう一体はまだ一メートルにも満たない程の大きさ。

おそらく親子だろうその二体は、仲良く水を飲んでいる。

やがて水分補給が終わり、今度は親が子の体の毛繕いを始めた。

気持ちよさそうに目を細めて、子どもは親の毛繕いを受けている。

顔や背中、脚を済ませて、今度は仰向けにさせてお腹を舐める。

やがて、子どもは気持ちよさに目を閉じ、そのまま夢の中へと旅立ち、親は子を護るように伏せの姿勢で座り、優しい瞳で子を見守る。

それはとても心温まる光景だった。

そんな光景を、鳥も見守っている。

この鳥は・・・・・・何なんだろう？

魔物・・・とは言えない。

全く別の存在の様な・・・不思議な感じ。

でも、こんな存在には会ったことがない。

この状況も会っている、とは言えないかも知れないけど。

考えても分からないか・・・。

また視線を親子に戻すと、母親も同じように眠っていた。

この森がどこなのか、なんて知らないけど、周りにはたくさんの魔物がいるのに大丈夫なのかな？

それとも、湖には魔物が近づかない・・・なんてことはないか。

それならどうしてこの親子は近づけるのかって話になるし。

動けないのかな？

考えは全く別の方向にシフトして、あたしはこの場所で動くことができないのかについて考え始めた。

まずは腕を動かしてみようと、力を込めるとなんのことはない。

簡単に動かすことができた。

足もちゃんと動く。

それを確かめて、あたしは少し探索をしようと思い空を歩こうと足

を動かした。

――人の子よ

でも、突如聞こえた声に動きを止める。

男性の声にも女性の声にも聞こえる、不思議な声。

なに、この声は？

いや、そんなことよりどうして夢の中の筈なのにこんな語りかけるような声が聞こえるの？

頭に直接響く様な声が・・・。

――驚かせて済まぬな。だが、心配するな。妾はお主になにもするつもりはない

『だれ・・・なの？』

聞こえる声に、問いかける。

――先ほどからお主の目の前にいるであろう？

言われて思い当たったのは、山頂に佇む大きな金色の鳥。

『あなたなの？』

――そうだ。今、お主は精神だけが時を遡っているのだ・・・俄には信じられぬがな。おそらく夢を通じて、その様な現象が起こったのであろう

『遡る・・・ここは誰の過去なの？』

どういう訳か、あたしはその言葉をすんなり信じることができた。

ハクアと契約した時の分からないのに分かった感覚に似てる。

――先ほどからお主が見ていた者だ

言われあたしは、今も寄り添い合って眠っている黒獣の親子を見た。

それを肯定するように、鳥さんは頷き言った。

――もう間もなく、あの子の親は殺される

『――――え？』

どういうことなのか、理解する前に、聞こうとする前にそれは起こった。

グオオオオオ！！

咆哮が轟き、次いで聞こえてくる轟音。

森の木々を薙ぎ倒しながら、十メートル程の蜥蜴の様な魔物が湖に向かって進んでいた。

その先には黒獣の親子がいる。

今の轟音で親子は目を覚まし、母親が子を護ろうと前に立ち迫ってくる蜥蜴を威嚇する。

やがて迫ってきた蜥蜴は、親子を見つけまた咆哮する。

――あの魔物・・・リザールは、この森に棲む魔物の中でも他の魔物とは一線を画している。並の魔物では、五分と持たぬであろう。

無論、あの親子も例外ではない

この鳥さんなら、対抗することはできるだろうけど、動かない所を

見ると助けるつもりは無いみたいだ。

それとも、動かない、ではなくて動けないのか。

どちらにせよ、鳥さんは何もするつもりはないみたいだ。

親子を見ると、既に戦いは終わった後で、リザールが横たわる母親に近づいている所だった。

子どもは、小さいながらも必死に吠えて母親を護ろうとしているけど、母親の鳴き声によって吠えるのを止めた。

その一鳴きにどのような意味が込められていたのかは分からない。

でも、それを聞いた子どもは母親とリザールに背を向けて森の方へと駆けていった。

それと同時に、母親は首もとに噛み付かれて、絶命した。

――これから、あの子は独りで生きていくこととなる。誰の手も借りられず、誰かを頼りにすることもできず、唯独りで・・・

これは過去に起こったこと。

それが分かっていても、何もできないというのは悔しい。

――お主が今何を思っているのかは分からぬ。だが、これは既に起こったことなのだ。どうすることもできぬ

あたしはその言葉に、何も返すことはできなかった。

――追いたければ追うがいい。ここで追わなければ、お主の精神は元の時間に戻る。そうなれば、二度とこの時間に来ることはできぬぞ？

それを聞いたあたしはすぐに翼を出して、子どもの後を追った。

あの子どもとあたしの間に何があるのか？

それは分からないけど、追わなければいけないと強く思った。

――妾の名は『フェルニクス』。人の子よ、次に会う時を楽しみにしているぞ？

―過去―（後書き）

ハ「なんだか、不思議な展開になってきたね？」

ラ「あの親子、可愛そう・・・」

ム『仕方ねえよ。野生の世界は常に弱肉強食なんだからな』

フュ『それが分かっていても、悲しいどすな・・・』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7765y/

高町亜美の物語

2011年12月11日14時02分発行